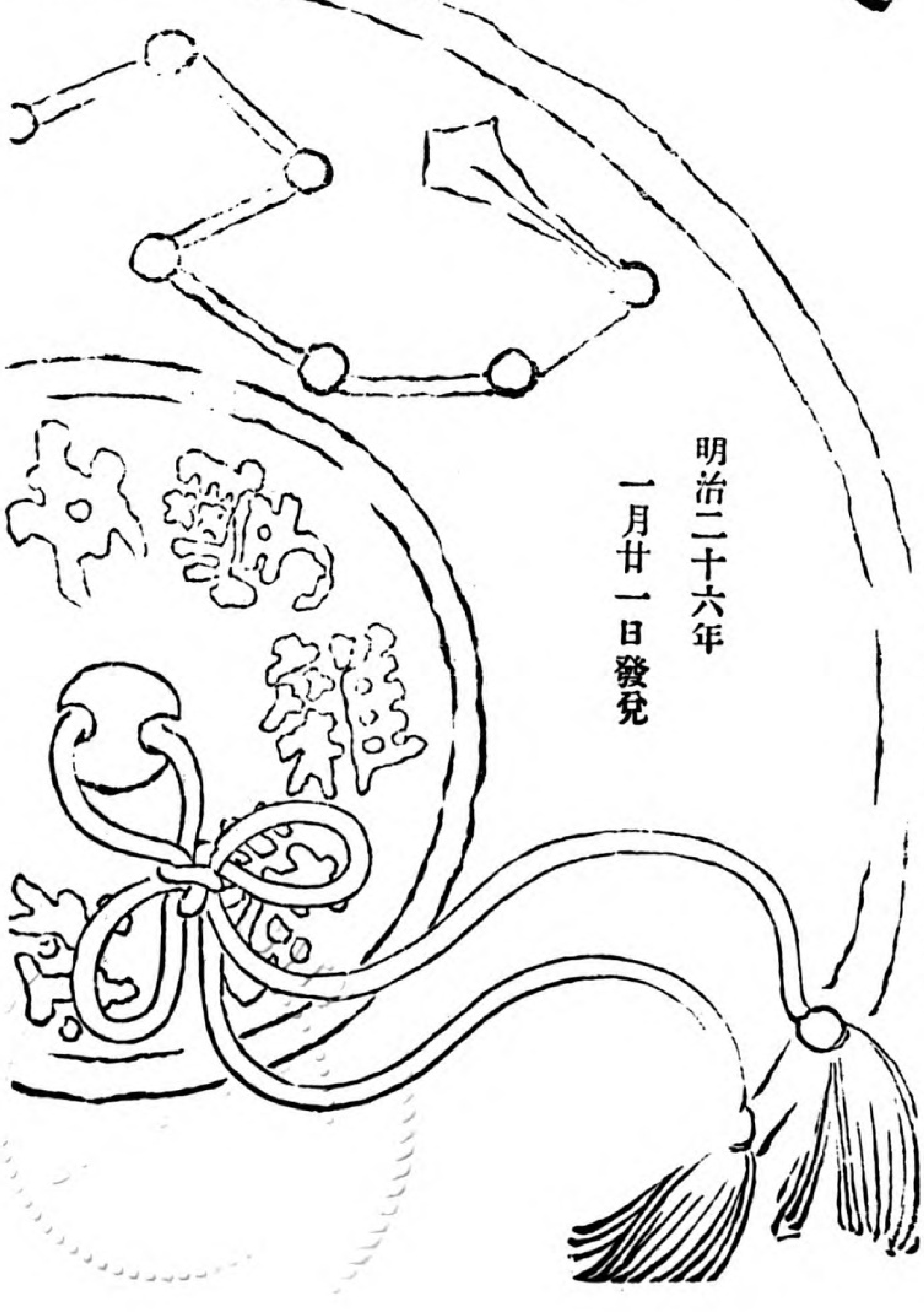
# 女學雜誌

第三百三拾六號

乙の巻



明治二十六年一月廿一日發兌

注意

# The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 336. JANUARY 21st. 1893.


## 本號（第三百三拾六號）目次



## 前週（第三百卅六號）白表



## 前々週（第三百卅五號）赤表

女學雜誌
第三百卅六號
明治二十六年一月廿一日發兌

# 社説

## 米國婦人禁酒會の年會

全世界の數多なる婦人會の中にて、日夜に進歩して、其捗の年々に驚ろく可きは、フランセス、ウイラードが主宰する婦人禁酒會に及くものなし。而して、此會は、稱して禁酒會と云ふと雖ども、其關係する所ろ、社會、政治、宗教の三の區域に迄で及ぶ、一言すれば、尤とも開化せる婦人が、八方の事務に對して、正當の權利を要め、且つ其力量を顯はすものとすべきか。

去年暮、米國デンバーの三一教會にては婦人禁酒會の第十九年會なり。此時、會長ウイラードが演説せるものゝ中より、尤とも注意すべきもの、尤とも賛唱すべきものを、左に摘み、以て我國同志の人々に示す、

人の生涯の最後の動力は其の意志にあり、確信することを得せずと云ふ人の弱點は言譯とすべからず、吾等が聞き亦た知れるものの中、最とも良き者を確信するを人の務とす。學者も、發明者も、探見者も、皆其假説を立てゝ、之に全力を凝め、之を實地に執行するに非ずや、基督教徒も亦た其信を立て、之を實行せずんばある可らざる也。人と介貝との相違は、一は確然たる希望を有し、他は基なき蜃氣樓を吐くの所にありて存す。獨逸の詩人ホッフマン氏、臨終に悲しき息を發して云く、

○○○扨ては、吾等も亦た○○○神の事を考へざる可らず（"We must then think of god alse"）と。之れ實に憫れむ可き言葉とす。夙に神の事を熱慮の中に置き、之を「亦た」の中に放置せざる人こそ幸はひなれ。

近頃ろ問ふ人ありて數ば云ふ、何故なれば、婦人諸君は、其會の門を開ひて男子をも入れざるやと。寛大にして高氣なる人々のうちにも、此疑問を發する者多きことを聞く。余之に答ふ

レビット夫人は八年間全世界に週歷し、世界婦人禁酒會の組織と、禁酒請願を各國政府に呈するとの二大事業の爲に働らき、其一生の最とも貴き時代を之が爲に費し、生力を殆んど枯らしたり。余思ふに、玆に一万弗の金を募りて、之をメレー、クレメント、レビット資金と稱し、夫人存生中は、其利子を隨意に使用し玉はんとを請ひ、其后は全世界婦人禁酒會の事に功ある人に對し、相談の上之を寄附するとしたり。此よりも少なきとを爲すは、殆んど不正に均し。働らくものは其糧を得可き筈也。

遠方にありて、部會、支會にも入りがたき人の爲に、「レヂー、ヘンレー、ソマーセットの婦人禁酒會なるものを組織す。之に加盟する人は、其地名姓名を報じ、禁酒を盟ひ、白標を着け、正午に祈禱し、一年會費五十錢を送り、ユニテン、シグナル一部を注文するか又は注文者をつくるべし。而して、男子亦た之が名譽會員となるとを得、白標を着るとの外、すべて前述する所に同じ。

各國政府に提出する禁酒請願は、今や署名人百十一万二千七百三十五人あり、請願書の長さ十二英里あるべし、署名者は一々傍らに短句を書す、「酒狂者の爲に家なき女」と書きたる不幸の極より、「六人の禁酒主義投票者の母」と書したる幸の極みまで、樣々の署名あり。而して、今尙ほ續々として署名者加はる。

ウエスト女史の發企に係る、禁酒事業學校を開き、此の運動の法方を敎へ、合好せる書記生を造るの案頗ぶる可し、其實行せられんとを祈る。又、本年より、地方分會の共和を計る爲に、一の新しき分局を置たり。

# 雜録

## 在朝鮮日本婦人の希望

在仁川　青山好惠

余をして朝鮮殊とに此の仁川港に在る日本婦人ならしめば、必ず先づ余は第一に、産婆を業とせらるゝ、中年婦人の日本より渡來せられんとを希望するなり、蓋し出産の事は婦人の一大難事一大要務にして、而して安らかに出産し、且つ完全なる人間たるに適する赤子を得んとは、婦人の尤も希望する所なりとす、左れば日本の如き婦人の出産補助に關する萬般の事整頓せる國に在りてすらも、婦人の出産は尤も大切なる尤も困難なる事として考へられ、産婦の父母良人兄弟姉妹及相知れる人々は、産婦の分娩を安穩ならしむる手段に就きては、實に盡くし能ふ丈けの心盡しをなすなり、其れにてさへも尚ほ往々にして出産當時の誤れる手續しより、母子共に非常の難厄を見るとを免れず、然るに朝鮮に於ては、出産當時及前後に尤も必要なる、産婦が分娩するに就きて唯一の手助けなる産婆なる者なきなり、況んや其他の種々なる婦人の出産を安穩ならしむべき手段をや、而して在朝鮮の日本婦人は單に婦人の出産を世話する事に手慣れたる相知れる婦人の助けを受くる外、或は經驗より幾何か出産の世話をなし得る素人の産婆と稱せらるゝ人の助を受くる外、此尤も大切なる尤も困難なる出産の務めを助け與るゝ者なきなり、其出産の當時及前後の困難苦痛果して如何ばかりとなすや、其眷屬知人の心配果して幾何となすや、想ふに日本に在る既に出産の事に經驗ある婦人達は、十分に之れを知りて同情を表せらるゝ所ならん、然し婦人の出産をして困難苦痛ならしむるに、單に産婦の困難苦痛に止まらしめば尚ほ忍ぶべし、然りと雖ども婦人の出産補助法の不完全なるが爲めに、往々にして産婦及出産の赤兒を死に瀕するの不幸を見せしめ、若くは死に致すが如きあるに至つては、博愛の人寧ろ涙なからんとするも得んや、左れば此地に於て上等と云はるゝ程の富貴なる人の妻女出産の時に當つては、一家内の事情及金力にして許す限りは、多くは態々日本の大坂若くは長崎に赴きて出産せしむると此頃に至り稍流行するに至りたれども、此れ實に非常の時日と數百圓の金錢を費さゝる可らざるの事なるを以て

到底一般中等或は中等以上の生活をなす者の婦人にてさへも、爲し能ふ所ならざるべし、在朝鮮の日本婦人が出產に關して苦痛を感ずる此の如し、左れば余をして在朝鮮の日本婦人たらしめば、或は余をして余の此れ等日本婦人を憐む愛の心情よりして云はしめば、余は第一に產婆を業とせらるゝ日本婦人の此地に渡來せられんことを希望するなり、而して其婦人が基督敎徒に非ずとするも、基督敎を是認し、併せて品行正しくして婦人の摸範となり得る程の人を得んことを希望するなり、產婆を業とせらるゝ婦人の日本より渡來せらるゝに當つては、此地に在る日本婦人が如何に喜ぶかは、殆んど想像の外ならん、而して此海外の地に在りて、此の仁慈の業に從ふ、產婆を業とせられ其人の爲めにも、亦面白くして名譽ならんことを信ずるなり、此地に於る日本婦人が、出產の時に當つて常に見るに忍びざる苦痛を受くることを見る每に、余は常に何故に余は婦人にして、而して產婆を業とするものならざりしやを嘆ずるなり、既に此地に渡來せんとせらるゝ產婆を業とせらるゝ婦人あらば、余は此れが爲めに應分の助けをなすことを喜ぶなり。

第二に近時日本基督敎社會の問題となり居る、朝鮮傳道の事愈々實行さるゝの時に至らば、傳道者の過半は婦人ならんことを望む、何となれば予が常に通信するが如く、朝鮮の社會を開拓するは先づ其婦人社會よりせざる可らず、而して然かするに於て日本婦人は種々なる事情より最も利便を有し、男子の傳道者よりも功を收め易きを以てなり、豈に在朝鮮の日本婦人が己れ等の强助援を得るが爲めのみと云はんや、而して若し愈々婦人傳道者を此國に送るの時に至らば、其婦人は少くとも三年間韓語を研究すべし、而して傍ら當國の事情を探究し、或は在留本邦婦人を敎導せんことを望む、朝鮮傳道者の過半に婦人を加ふると否とは、予は敢て朝鮮傳道の成功不成功に關すと云ふを憚らざるなり。

第三に當國に來りて韓語を研究し、朝鮮の事情に通曉し、朝鮮人士と交際し、朝鮮語通辨者として本國に於て其本國の爲めに働かんとする如き人の日本婦人中より出でんことを望む、何となれば幾多大目論見ある日本の事業家が、此國に事業を成さんとするに於て、第一に必要を感ずるは、深く朝鮮紳士の內幕に取入り、其一家內と親交を開き、以て事業上必要な

る事情を探ると是れなり、而して此時に當り尤も必要を感ずは婦人の通辨者なり、何となれば、男子の通辨は內房に踏み入ることを得ず、朝鮮婦人に接することを得ず、而して對手の主人も男子の通辨者には多く疑念を抱きて親密の談話をなさず之れに反して朝鮮人は婦人殊とに日本婦人を敬愛す、而して婦人には放心して胸中の秘事を談話す、朝鮮人に取入る最良機關たる其の婦人と相見ることを得る等の利便あればなり、先任京城駐劄露國公使ウエバー氏が、此地に活潑機敏の運動をなし得たる所以のものは、全く其夫人令孃等が此の秘訣を悟了し、巧みに韓語を使ふて深く諸大臣の夫人等に交りを結び常に知り難き內部の秘情を探知したるに依ると云ふ事、亦好一例となすに足らん。

第四に余をして子女を有する婦人ならしめば、余は切に學術技藝、德行に富める日本婦人の此地に來て、女子敎育に從事せられんことを望む、盖し朝鮮殊に此仁川及京城の地の如きは女子の風儀殆ど頽敗の極に達し、學才高しと稱せらるゝ、良家の子女迄も、藝妓の眞似をせんが爲めに娘料理屋なるものを開かんとせるに至る、寧ろ慨嘆に堪ゆべけんや、僅に二三の取除きを以て仁川の女子社會は、在日本の姉妹達が想像し能はざる程の腐敗の中に陷れり、而して此れ多くは女子敎育の不完全否皆無なるに基因せずんば非ず、女子敎育の一事は今や必要の絕頂に達せり。

在朝鮮日本婦人の希望盡さずと雖も畧ぼ此の如けん、而して余輩在朝鮮の日本男子も亦大に同感の意を抱くものなり、我が故國なる廣き日本國、豈に勇んで此八百里外の異邦に働くの一婦人なしとせんや。

## 今昔もの語り

○硬漢　　秋玉庵輯

織田信長の許へ、生駒万兵衞といへる侍奉公に來りしに、或る先輩の士之に對面していへるやう、貴殿の名に三ッの不審あり、滿兵衞か、まん兵衞か但しは万病備か、承りたしといへりしに、万兵衞答ていへるやう貴殿の御不審は余儀なし、拙者に於ては何樣に御呼びあるとも苦しからず。凡そ人の腹中には虛實あるものなれば、腹中空虛の時にははねていふべき力あるまじければ、其時はま兵衞と申されべく、又腹中充滿して意氣盛なる時は、万兵衞とはねらるべし。但拙者

の名は生駒万兵衛と申ぞといひしかば、問ひし士詞なくて却て赤面したりといふ。此万兵衛といへるものは、年若き頃より人に譽られたる士にて、後には生駒内膳といひし者なりと。

○賢　妻

土肥次郎實平が妻は、遠平の母にて生れ付才智ありて慈悲深く召遣ふものにも常に憐れみを垂れければ、家内の男女ども皆忠を思ひて些も主家を踈にせず實平おり〳〵は物荒きことあれど、妻能く之れを諫めて家を治めけり。兵衛の佐源頼朝の兵を擧げて八州の家人を催すや、實平未だ心決せず、如何はせむと思ひ煩ひけるに、妻諫めているへやう、夫れ東國に在るの武士は皆源氏の家人に非ずといふ事なし。一旦時世の習ひにて平家に從ふとあるも、幸に今源氏の嫡流既に時を得て旗を擧げ玉ひし上は最早遲々し玉ふとあるべからず。妾倩ら時運を見るに平家は驕りを究めて天下の人望に背きたれば能く久しきを保つこと能ふまじ、佐殿は生れ付威ありて外に猛からず、謀ありて内に智を藏す、天下を治むべきの器量ありと聞へたり。急ぎ味方に參り玉ひて大功を遂げ玉へといひしかば、實平大に悟りて遠平と共に頼朝の方に屬せり。斯くて頼朝は一度大庭梶原に破られて、土肥の杉山に隱れしが其時糧盡きて餓に臨みしと、實平の妻郎黨一人に髪を削らせて僧の姿に扮裝せ、おしかの中に飯を入れ上に樒を蓋ひ、閼伽の水桶には酒を入れて、行人法師の花を摘むやうにもてなし、忍び〳〵に送りければ、杉山を圍みし大庭梶原の兵も、見咎むる事なく夫れが爲に頼朝は命恙なきことを得て、間を覗ひ杉山を出たり。其後も此婦人文にて三浦畠山の軍の樣など、細々と報ぜしかば、頼朝大に便宜を得て遂に平家を亡すの階梯を造りたりといふ。賢婦人の功惟り内助に止まらず、其主將をも益せしは世にも愛たき例にこそ。

○昔の人と、今の人

老人大勢集りて、いろ〳〵の話しをなしけるに。其中の一人曰く、昔しの人は、何れも強壯にて、長命なれど、今の者は兎角に病み易し。是は、生れ付弱きに依りて、夭死するならむといへるに。才覺ある老人一人其席にあり。之を駁していへるやう。夫は昔と今の、相違にはあらず。古今共に、人は同じき筈なり。昔も強あれば、亦弱もあり。されど其內、弱は滅し、強は殘る。故に今の世の人とても、弱は死し、強ものゝみ生き殘り

て、年老ひたる后になれば。昔は人の生れ付強くして、かく長生するといふならむされば物事、何事にても皆斯の如しと。老人の言面白し。

## ○風俗の變遷

凡そ世上の事々物々、歳月と共に、移りゆくものなるとは、今更言を俟たざれど。其中にも、別て著しく、目に立つものは、風俗の變遷なり。予の如き、年若きものにてすら、はや物心覺へてより、幾度衣服調度の、移り替りを見たりけむ。況して、儀式、遊興の類にまで、目を注ぎたらむには。餘程昔とは、變り居る事なるべし。勿論今の時代には、明治維新といへるとありて。万事万物、例外の激變を來したる事なれば。風俗の著しく變遷したる、強ち怪むには、足らざれど。さて顧て、近古の書を繙き。二三百年以來の風俗を比較するに。常に變遷の跡絶へず、遂に今日の相違を來したるなれ。諸姉の、參考にもとて、其一端を左に記さむ。享保の頃、ひとり言とて、或る人の手になれる書に。

前略、わが親しきもの丶中に慶長元和の頃生れたるもの。男にも、女にもありて。寛永の頃を、年の盛りにて、經たりといふに。男は冬革のうちかけ、革の袴を美服とし。女は、紫の襪子をはくを、能き化粧とはせりといふ。其襪子は、わが幼き時までも殘りてありしなり。婦女の帶は、金襴を美華の極とし。黒地に梅、さくら、松を、ところ〳〵に織つけて。是を鉢の木の、帶と名けて珍重しけり。廣さ纔に、鯨尺の二寸ばかり。紙をしんとして、綿など入るる事なし。四月より、八月まで、婦女の禮服に。綿にて、廣さ鯨尺の、八分ばかりなるを、背後に結んで、垂る丶を、つけ帶といふ。今のつけ帶は、昔の常の帶よりも廣し、今の人に、昔の事を語れば、虚言と思ひて、一切信とせず。是等は我まのあたり見たりし事にて、詐にあらず。……婦女の帶も、貞享元錄の頃より。漸く廣くなりて、今は鯨尺にて、七八寸に及べり。綿をしんとして、褥の如し。…………寛永の頃までは、婦女細き麻繩にて、髪を束ねて。其上を黒き絹にて卷しに。其後麻繩を止めて、紙にて結ぶ。越前國より、粉紙にて、元結かみといふものを、造り出だして。海内の婦女皆之れを用う。夫より絹にて卷く事も止みぬと。我父正しく、之れを見て、語りき。……又此

頃の男は、小袖の裏を紅にし。或は紅の肌衣を、袖口なが
にして。腕を纏ふばかりに、ひらめかするもの、多く見ゆ。
女は却りて、縹の裏、白き裏などを着るめり。是等は男
女、處を更ふといふべきなり。
など記したり。是に今の狀況を較べたらむには、其間幾變遷
をなし來りたるならむ乎。必屈指に遑あらざるべし。今若し
昔の人を、九泉の下に、呼起し來らむには。今のもの丶、昔
を信ぜざる如く、昔の人も、亦、今を疑ふなるべし。されば、
今敢て珍らしとせざるとも、後の世より見れば、話柄ともな
る事ならむかし。

# 史傳

## フランセス、ウイラード　（其四）

### 敎師としての働

女史は左の二條を己が心得となせり、第一生徒をして己を計らしめ或は己の意を迎ふる樣なさしむべからず常に生徒に對して神秘たれ、彼れ等の思ひ設けぬ事を以て計るべし。第二大事にも小事にも生徒をして從順ならしめ、一歩も讓る所あるべからずと。又女史ヌノルス、ウエストルン女子大學に於ける敎授時間次の如し。六時起床、化粧して室內を掃除し、朝飯を喫して後當日の日課を調へ（素より前日既に調へたる處を再びするなり）禮拜堂に出て司會をなし、高等科の算術地理代數ウヰルソン氏の萬國史を敎へ、正午クラーク孃と語り、晝食を終へ、暫時にして雄辨法を敎へ、次で動物地質生理金石等を敎授し、後ち暫くにして樓上の室に入り始めて身躰を休むるを得たりと。

嘗て敎育に新奇なる方法を執れり、イパンストンのグローブ學校に在るや、生徒をして各銀行たらしめ、若干の札を分ち之を以て平均の財產となし、若し欠席怠惰耳語或は暗誦し能はざる等の事あれば直ちに其財產より札を減ぜり、或は書學躰操等に付て問題を與へ、之をして又財產に關はらしめ學期の終に至り計算して優劣を判し最大數の財產を有するものを以て第一等となし以て奬勵せり。

### 歐洲行

千八百六十八年女史ケート、ヂヤクソンと共に歐洲に行き、兼ねて埃及聖地魯西亞等を巡回せり、此の行に於て女史の忘

る可からざる事あり、女子自ら曰ふ此の二年四ヶ月の旅行にわが爲さゞりし又後來も決して爲さゞる事三ッを行へり。即ち安息日に見物に出て、又演劇を見物し、食事の節に酒を用ゐたりと。此の行蹟に遊逸なりしと雖も女史は本國の生徒を忘るゝ事をせざりき、夫は歸國の節幻燈を携へ歸り、始めて幻燈の傳道を米國に紹介せり、女史は之を學校に用ひ以て歐洲に於けるが如く美術的の智識を發達せしめんとせり。

## 轉業

女史歐洲より歸り來り直ちにイバンストンの女子大學校長に任ぜられ、自己の主義を以て新法を敷きたりしが、不幸にして學校はノルス、ウエスト大學と合併するに至り大學の方にては女史の敎授法を是認せず、爰に女子大學の校長なる女史と男子大學の校長との間は衝突を起し、女史は遂に辭職するの止を得ざるに至れり、女史の辭職は數千の人の涙を以て送られ、學校事業は涙を以て終を告げぬ、左れども之れ女史をして女史の正道適任に就かしむるものたりしなり。

前赤表、本傳の家系及ひ家庭の上に第一の二字を脱す

# 小説

## 内助（下）

花圃

カールシユボイは婦人は男子とは敎育もことなり事理を解する力も自ら差別あれば、唯羊の埒の中にある如くなるべき者と思ひて、稍輕侮の思ひもそひ、おぼこ氣うせぬシヤンヌの眞心を買ひ愛するも、たゞ子供扱にして過したり、大方の子供は獨樂人形に甘心を買ふ事あれど、價高き衣服に寶石に心を動かさせ、たゞそれを又わが玩弄物にして、婦人の言を容るゝをはづかしく思ふは、資性の頑硬なるを誇る男子の僻見なめり、されば内助としてシヤンヌを取扱ねば、係る時には遂にわが眼のみか、妻の愛をも失ひて、きのふの愛はけふの恨となれるも理なり、シユボイが病に臥せしより、來訪者の名刺音問の書狀卓上に堆だかく、諸新聞にも痛悼の思ひを顯し、其文才をほめたゝへしが、いつしか人も門前にかげ見えず、書狀もちりばみて殘るのみ、名をだに人もいはぬやうに成りしに、いとゞ思ほそるシヤンヌ、悲しさ堪難く、家の破滅も遠からじと、書類抔片付る手にふとさわりし一片の紙、推開けば見もうたてき、かのサポーの受取、價は二百五十フランと筆太に

かゝれたるも、そゝぐ涙に見わかず、俯せしまゝ忍び音に泣沈みぬ、かくとはしらぬシユボイも見えぬ眼はうつろなれど、聽神は著しく鋭くなりて、柔かき手にあたゝかき介抱はうけながら、何となく、妻の心のかはりしやうおもはれ、裝ふ聲音のやさしき中に、われをうとめる心、反旗を飜して、心の底の秘をあばく如感ぜられ、胸穩かならず過しけり、これに引そひて病中の入用この頃の奢侈に家計も日増に苦しく成て、數多き傭人の雇をも解き、馬車も人手に渡して、今日迄の榮耀は夢に歸せんとする最後に、或人のすゝめにより、家宅も賣拂はんといひ出しシヤンヌの决心をシユボは、反對して、たとへ目はしひたりとも、腦にかはりなし、一の書記あらば、著作の事に從ふもかたからず、さのみ案ずる事かはと輕々しくは言斥けたれど、もと小說は衣服の色合とおなじく流行を追ふものなるに、シユボイも一時の人氣は後れはて、末永く保ち得ん事かたかるべし、とシヤンヌは切に相應の家に借住せんととききすゝめぬ、今は全く快服したるシユボイの眼は、一眼全くしひ一眼はかすかにものゝありなしを見分るやうなれば、いでや著作の業につかんと、設想をこらし、材料を思量すれど

悲きかな、うすぐらき黒幕は腦をもおほひ盡しけん身は夜も、陰にたゞよふ如く、一の幻影も見とめ得ず、悔恨の情に堪兼てもだえくるしみ、妻の薄情なるをさへ思ひうかべて、晝は思につかれ、夜は何物にやまなくおそひきて、夢も穩かならざりけり、移り住し家は高き四階の上にて、間廣く、赤煉瓦のむき出しなる哀さ、曾て住慣し光うるはしき蠟引の滑らかなる地板に似べくもあらぬ足ざはりなり、或日しれる友に許嫁の悦に招待され、しばし見ざりし交際社會に立まじりしに、こは珍しと喝采はうけながらも、昔の朋友の奢りを極し衣服を見るにつけ、わが身狹うおよそひろき天下に身の置處なき心地して、くやしく恥しく、我夫うらめしく、にこやかにつくる笑顔のうらの歎きは、いふ斗もなく、この行末もいかに成行身ならん、眼の前には義務といふ人に許れぬ者も控へ、操守といふ、心のせむる者もありて、そしりを恐るれば利益少なく、利に走れば人の中に立まじらふもおもなき身と成果ぬべしなど、種々の思ひに沈み勝なり、歸りし軈て心配氣に夫の部屋に入來し時は柔和の面うるはしく、愛敬溢れてさしのぞきぬ、かゝる時に眞情を以てむかへば、新婚の愛に復しうべきものを、室內には

薄暗きランプともえさしたる爐中の火に照されたれど薄暗く淋しき限りを示したり、ジユボイは全く眠りしならねど、妻の心をくみては、今宵言葉をかはすもつらく、假のかくれ家を華胥國に求めて、氣息にいつはりなりと悟れる妻の心も知ず、身じろぎもせで伏しゐたり、ジヤンヌは今宵久し振にて交際社會に立まじり、越し方をかへり見て、遂にはあだに費せし奢侈をあさましく思ひ家に歸りなば、病める夫の爲身を犧牲にして浮きし心は出さじ、とけなげにも決心せしに今又夫の冷かに寐入れる狀をよそほひしを見て、意に又心を飜し、なにとてかく迄にいみきらはるゝならん、と益恨を添へたるも是非なし、ジユボイは目こそしひたれ、妻の助を得んとの心なく、以前の如く妻を愛の、榮耀に誇らせて、われもそを見て樂しまんの樂境にもとらんの野心にて、氣力痲痺して、忽ちに厭倦するにも拘はらず、業を助けしめんとて、一人の書記を雇入れぬ書記は巴里にて某演說者に隨從し、筆記をせんいとまに一日一時間づゝ來らんとの約を結びぬ、少年書生の習とて、學問に疎きをも憚らず、この不平の病者に批評を試み、思を練り躊躇へば、筆を指を挿みて催促の咳ばらひいとせはしく、時斗の針の進みにのみ耳をかたむけ、不親切の狀あるは、視えぬ眼にもみえすきて腹立しく、おもへば〳〵實に不幸は獨しては來らずてふ、諺は誠なりけり、その昔、木々の青葉庭もせに茂れるを見下す樓に、あけば後園の花にうかれ、新鮮の空氣を吸ひ心を養ひては又のぼりてかきくだせし時階下の人聲人音をも叱し、かき終りし頃をはかりて、妻は一盃の架非を手に練絹の裳ゆたかに靜々と入來りしを、今はたゞこの一書生にあなどられ平らかならぬ心を慰むる花なく、架非なく、心あしき借家の四階におし込られしも同じき有樣これがかつて筆下に萬丈の氣焰を吐き、巴里の大都會に一大文人とたゝへられし末路かと思はず手に手をとりしばりて、自ら憤り自ら恨む、千萬無量の思いつしか立歸りて書記も居ぬ室內を、大またにあゆみて又思ふやう、かゝる苦も我一人ならば堪ゆべきを、さらぬだに心よわくあどけなき女氣のジヤンヌはいかに、この頃の有樣の變れるも道理なり、今日は何方へ行つるにや、昔馴染の友達とかたり樂むにや、否否、かたるとも樂しからじ、甲斐なき不具の夫を持加るに貧乏は後に迫るを、何とてかのやさしき心に堪忍びうべきぞ、嗚呼我程はかなき者はあらじ、一男

子と生て妻をなぐさむる事もなく、夫の德義にそむき、又弱きを扶くる事能はで、男子の義務を盡さぬなり、德義に背き、義務を盡さぬ者の、何に此世の中に容られん人に面を見られんもはづかし、ア、世の中にてあきはてぬ、あの年若きジヤンヌをうたぬ答にさいなむは、吾身なり、われなくば、また花の盛りをちらぬまに、又よの中に香りを放つ事もあらん、實に然り實に然り、とあまたゝびうなづきて、見はろ限に薄あかるきはたしかにおぼゆる窓、手をかけて見ぬと見おろす下は數丈、決心したる片足を窗にかけ、あはやとみゆる折、こわるゝ斗入口の戸づきはなし、かけつけし妻のジヤンヌ又うしろより飛付て、どうぞ思ひとゞまつて、何故に、と。涙ながらに聞ば、身にしむ斗うれしき夫の心根したにもゆる熱愛をつゝみてよそほひし冷さに、一度は氷りし愛もうちとけて、春風かほる夫妻の眞情、いだき合抱き合二人の眼より涙の泉は涌出ぬ、一度妻の爲に死せんとせしより、かへりて蘇生せし愛情に新婚の昔を想起し、うち笑ひつゝかたり合中にも、かゝるたのしき境界を捨て、なぞかるはづみなる事をなしけん、とていひ出ぬ日はなかりけり、心もおだやかになれば、書記のあなどりも氣にさはらず、書記も追々になれて從ふにいよ〱はげみて、一小說を脫稿しぬ、同じき部屋の中ながら、今は樂園の如き四階に、椅子を並べその草稿をジヤンヌによましめ、余念もなく聞居しが、終もまたず立上りて、引たくり、其草稿を寸々に引裂き〱、之が、之がジヨボイの作なるか、といきまきたり、ジヤンヌは心も心ならず、又もやはげしき怒にて、物狂しく成はてんかとさわぐ心をおしゝづめて、靜かにわが腕によらしめて、慈母が子供を取扱ふと、長椅子に橫にすれば、いつしか夫も子供となりて、鼾の聲も聞けり、ジヤンヌはしばし見つめしが、靜に立上りて机に向ひ、引裂きし紙片取あつめ、つぎ合せ見て一度よみし記臆のまゝをかきつゞり、遠慮がちの性質とて、夫も今日までは知ざりし文學思想と、天然の才智と、好る道とて幼きよりしのび〱に讀し者の本など、けふ始めてわれもおどろく斗り役をなして、字句のあやなど思のまゝにかきおはりぬ、めさめし夫をさきの椅子にあらしめて、こゝろみに今一度我覺えしまゝを書直せしを聞てよと乞へば、夫も笑ましげに耳をかたむけ聞に、いぶかしき斗なる文章の妙、わが妻のいかでかく迄に、とうれしくも、又いまゝでかくとしらざり

しをはづかしくも思ひ其日よりジャンをわが書記とし試むるに、ジャンスも勵みて批評し訂正するなど、いづれも夫の心に協はぬふしなく、夫もこれに力を得て文思增々發達し、妻は日々商議討論して、いよ〳〵夫は妻の才に服し敬へば、妻は夫の心に隨ひて、ます〳〵從順となりて、今迄しらぬ樂境に入にけり、ジユポイは今迄ものせし時好に投ぜしものを見るにつけても、汗を背にひたすやうなりしは、ジャンスが不朽てふ文字に心づけよといひしを深く感ぜしにて、今又かく名譽を挽回せしも、全くわが愛する妻の內助にて、命の親、名譽の親とはわが妻の事なりと、幾度もくり返し〳〵淚ぐみて語りけるとかや。

### 片珠聚則

○常に長く登用されんと欲するものは怠惰者なり――ソクラテス
○人の力は用ゆるに從て益々加はゝるへし――バズリツト
○些細の事積んで完全をなす――ミカエルアンセロ
○人は播きし者より多くを刈り入れ得るものなり――ボールドマン
○精神を盡して道を行へ――ロングフエロー
○怠惰は年と共に生長す――サー、マシマー、ヘール
○汝何人に對しても許す事をなすべし――ヘルバルト
○悔恨は無用なり――博士プーア
○聽くに注意し判斷に公平なれ――ソクラテス
○汝の事業の一部を鄰鄉にせよ之れ汝の名譽の懸る所なりポープ――

## 論説

# 女子撰擧權に關する古今卓説集

櫻月子

一國の行政に關する職分に付ては女子と云ひ男子と云ふの區別あるべからず、共に同等なる天賦の賜を有す――プレトー

一國の政務を負擔するに堪ゆるものなれば、余は喜んで之に與るの特權を與ふべし、素より婦人と雖も辭せさる處なりし――アブラハム、リンコルン。

女子の撰擧權は文明の進步に從て必ず來るべきものなり――チャールス、サムナー。

法理は女子の撰擧權を是認するものなり――シワルド

女子の撰擧權に依り女子は勿論其他撰擧、被撰擧人幷に政府の被る利益は莫大なり――大審院長チエース。

女子の撰擧權を得るに至るは必然なり、余は其の結果の大なるべきを期するものなり――ロングフエロー。

余は今に至るまで四十年の間左の確信を公言するに躊躇せざりき、曰く正義よりするも法理よりするも又た共和の主義よ

りするも、市民は男女に拘らず同等の權利を有す、余は女子の撰擧權を與るを否むの理由を見る能はす――ホイフラオル

余は信す吾か米國は各々個人を保護するの大主義を世界に示したり、余は此の主義の婦人にも及ばん事を切望す、而して女子が撰擧權を得たるの日は即ち此の主義の及びし日なり
ウエンデル、フイリツプス。

人はわが女子の撰擧權を主張するの理由をわれに問へど、之れわれに取りては明々白々の理なり、何んとなれは税金を拂ふものは其の金の使途に付て可否を言ふは當然の事なればなり――フローレンス、ナイチンゲール。

治者を撰擇するの權は即ち個人の資格を完ふするの道なり、故に其事情の如何に拘はらず男子の撰擧權は當然の事となれり、然るに今猶女子に撰擧權を與ふる能はずとせんか是れ實に正義の影だも蹈む能はざるなり――スチユアルド、ミル。

今假に男女兩性の差異を以て動かす可らざるの天則となし、女子は智力道德幷に躰力に於て男子に劣るものとせんかたとへ然りとするも是れ女子の權利問題を左右し能はざるなり、如何となれば其男子に劣る所即ち其權利を得べき理由に非ずや、劣れる者をして發達して善良なる者たらしめんが爲めに其便宜を與ふるは當然ならずや――ハツクスレー。

余は女子の撰擧權を贊成する者なり――フイリツプ、ブルークス。

余は余か有する智識と情とに於て女子の撰擧權を確信す――エリサベス、フエルプス。

女子の撰擧權を有すべきの理は面白く趣味を加へて解するを得るなり――情慾罪惡の如きものが禽獸に近き人民に依りて政勢に嘴を入るゝを得るとせば、道義志望の如きものが尤も淸潔なる人に依りて之に關する能はざるの理なし――エマルソン。

女子が一國に對し又神と人類とに對して勢を爲すは、是れ其の職分なるのみならす、又其の尤も高潔なる德を顯すの時なり――ジヨン、クインシー、アダムス。

余は近來議院に於ける女子の撰擧權問題に關する論議に付き深く悅ぶものなり――ジヨージ、ジユリアン。

女子は税を出すべし其の使途に付ては嘴を入れしむべからず自ら可否を言ふ能はざる法律に從はしむべしと斯くの如き論は成立すべきや、女子は君主專制國の生活あるを得て共和政

治の國には生活する能はざるや――アンソニー。

祈禱と女子の勢力とが神の爲めに間接の方法に依りて働きつつあるに猶今日の如き有様なれば、此の電氣力の投票函なる電池を通じて顯れたる日には其の勢力如何に大なるべき――フランシス、ウヰラード。

眞正なる一家は一國の模範なり、今日政務の上に女子を見ざるは之れ其の未だ野蠻たるを免れざる處なり、今日の國家は父を有すれども母を失ひたるものなり――敎師サムエルメイ

女子の力能く文學の社界より卑猥と粗暴とを追放せし如く、今日彼れの力能く法律の嚴酷と政治の腐敗とを除き得べし――敎授ウヰリアム、ハリス。

吾が國の主義に依れば納税と代表者とは必ず相ひ供ふべきなり、而して女子は納税の義務あり、左らば女子も撰擧權を有すべきは自然の理なり、一家の務が女子に委ねらるゝ如く、一國の勢も女子に委ぬべし――ビーチヤル、ストー。

君等が弱かりし時にわれ等は君の爲めに勤めたり、われ等今弱し、乞ふ君等われ等を助けよ、われはわれ等女子の爲めに投票權を望む願くば是れが爲めに勤めよ――クラ、、バルトンより軍人へ。

女子の撰擧權は女子に大なる智力を與へ女子敎育の刺激となり、女子自らをして道德職業社交上の權利を完ふせしむべし之れ恰も雷電の樹木を打ち破る如く大都府の罪惡を一掃すべし、余は此の改革の近きに在るを信ず――ジョーセフ、クーク

余は女子の撰擧權を以て其の權利或は特權となすのみならず其の義務なりと信ず、女子諸君は何故に一國の事を以て男子にのみ委ぬるや、此の國は又諸君の國に非ずや、神は諸君に才能を與へて此の國を聖からしむるに非ずや――ジェームスクラーク。

女子撰擧權に關し運動せし人の數は多くして到底悉く擧ぐる能はざれども、爰に終始此の事に關して著名なるもの一二を擧げん、ソマーヴヰル夫人ハリエツト、マルチノー、フローレンス、ナイチンゲール、ブラウニング夫人アンナ、スワンウヰツク孃コツブ孃クロード夫人リチェー夫人メリー、カーペンチー、ジェムソン夫人等なり――ミリセント、フォーセツト。

人類が世々に爲したる政治社交宗敎上の大事業が多く失敗せるの原因の大なるものは人類一半の權利を無したるに依る、

われは信ず女子を以て正當なる位置に登せざる以上は政治社交宗教の事必ず成就する能はず、女子の正當なる位置とは即ち權利を與ふるの事なり――チャールス、キングスレー。

女子の權利を自由にするは目下の急務なり、例令へ幾數歩を反對論者に讓るとするも女子が財産を所有し教育を受くべきの權利あるは明かなり、左らば此權利を保護する投票權を得べきは明白の理ならずや、之をしも否まんと欲せば吾が共和政府の大精神を根底より覆さゞる可らず――ヒッギンソン。

女子が撰擧權を得んと欲するは之れ善事を爲さんが爲めの一大方便なればなり――フランシス、コッブ。

社會政治輿論等の利害に關して男子の必要なるが如く女子も必要なり、因て勿論女子に投票權を與へざる可からず――チャールス夫人。

己れ人にせられんとする如く人にも爲せ」と之れ何人も知る金言ならずや、男子は女子の撰擧權を奪ふて好しとするや、否、然らば之れを與へよ、之れ金言を實行に顯すなり――敎師クレッグ。

# 兒籃

## 吾か宿の花

第八回（中）

若松しづ子

＊イッテヤ氏の方では家族の者から種々さま〲の問を掛けられ升た、女の癖としてヘレンは殊にうるさく尋ね立して、「どふしてあの方を連れておいでなさつたの」といふ斗り五六度も問ひ升た、父は終に

養生をさせやうと思つて連れて來たのだよ、わるい咳をするので醫者が空氣を變へて見ろといつたのださうだ、おまへ勉めてあの娘の樂と慰みになる樣に心配しておやりよ。

全躰どんな方でせう？

とんだ好さゝうな娘だよ。

ヘレンはキッパリと決斷したものゝ如く、

そんなら、わたしはあの方を一向好なひでせうよ、わたしは好さゝうといはれる樣な人は好かないのですもの、惡さうな人間が好なら、雜作もないお誂らひだ、世の中にはさういふのが澤山あつて困るのだから。

ですがネ、おとうさま、何かあの方のこと知つて入つしやるでせう。學校はモウよしたのですか？

本當に知らんのだよ、學校へ行たことがあるかないか、それも到然知ん位だもの、たつた一日逗留した其日の中に十人の子供の性質から來歷まで調の屆く譯はないではないか。

十人！オヤマア、わたしたちは十人も從妹弟を持つてるんですかネ、おとうさま、十人もある中ならキットわたしが好なのもあるでせうよ。チヤアレさん、このルーセさんのと知りませんか？

アヽそれは好娘ですよ、甘い菓子を拵たり何かして家じや何もかもあの人に聞に來と云樣なんで、性質も好方でせう。

それじやア矢張り嫌だらう、かあさま、田舍の人はいつでも〳〵買物をしたがつて、始終落つかないで、何か見たがつて斗り居升かネ？

父は膝の側へ娘を引よせて、

これ、この娘は自分勝手な考斗りするのじやあるまいネ？

ヘレンは顏を赤らめて、

でも、とうさま、わたしは見物に歩るくことが大嫌らひの御存じでせう？

だが、おまへは人に深切なことをするのは嫌ひであるまい、おまへの從妹は一生田舍に暮したのだからこゝへ來て見聞することは何もかも新しいに違ない、わたしの思ふ處では子供の世話におくせくと長い月日を送て來て、それで自然と身躰が倦み疲れ斗りだから、醫者よりも靜かに休むこと、保養することが利目が餘計あるだらうと思のだ、これまでは心に染ぬこと斗に束縛されてゐて、手も足も出れない樣だつたと母親がいふて居たよ、素直に育たが不思議な樣なものだ、

ヘレンは

いくつ位でせう？

さうさ、十七才位だらうよ、其位と思へば澤山の違は有まい。

だつて、おとうさま、一處に旅をなすつて、少しは話しをなすつたでせう、どんな風な方だか少しも御存知ないの？

父は笑つて頭を振り、お袋にむかひかういひ升た。

どふもあの家でも隨分苦しい世渡をした樣だよ、其割には氣樂な家だ。グラントは矢張り鬱憂的な人間だが、其點に於て宗教が餘程預つて力ありで、不思議と思われる程元と變

つて來たよ、以前の沈鬱な人間ではない、それに子供たちは母親の方に似て居る樣だね、例の借錢一件の處方に存外面倒でね、先づ今の處では、眼にたゝぬ樣に少しづゝ、何かにつけて補助をして行つて、さうかふする中にどうか工夫をする外はないよ。

夫人は

そんならグラントといふ人は餘程意地のある方ですね？

イヤ、それ計りでもないのさ、併し、今の處餘り強いてもいけないからネ、姉がいつたよ、それとはなしに、兼ての不埒を金づくで拭わふとするとでも想像してはいけまいッて。兎に角こつちで餘程注意してかゝらんといけないとは分つて居るんだ、グラントといふ人は少し變人だからネ、交際する者は余程遠慮をせんければならんよ、併し極好い人間だ、實直、謹愼といふ質で。

夫人は暫らく沈默で考へ升た、

わたしなどはさういふ位置に立つたら、どんな心地になるか知りませんがネ、現在の兄弟からあら隨分どんなものでも貰ふ氣になるだらうと思ひ升ネ、子供のと丈考へても遠慮は出來ませんネ、格別このルーセさん見た樣にみんな子供が下女のする仕事計りしなければならない樣なら、

併し知てる通りグラントハ僕の實の兄ではないからネ、それに此借財が有た計りに貧乏したといふ譯でもない、田地といふのが少い上に實入が尠いので、おまけに子供澤山と來居からネ、イヤぺたにまごつくとどれか蹈つぶしさうな程だよ、いつでも二人か三人そこらに這廻つて居のだから

さうですか？そんならなぜモット大きい田地をお買ひなさらないのです？

誰か？僕がか？大陽、大陰をなぜ買んと云のと同しとだ！

アレ、冗談じや御座ませんよ、兄さんの田地が少な過ものなら、大いのを買て、當がつて上たら好じや有ませんか

ヘンリも言葉を添へて、

本當に、おとうさま、さうなさいな。

ホイッテヤ氏は倚子に寄り掛つて大笑ひに笑ひながら、

女といふものは事務の事に大して明るいものだ、それだから保護者の必要があるのだネ、

マア、あなたわたくしの申たとになんともお返じをなさら

ないでは有ませんか?
それでは色々理由のある中で一ツ丈いつて聞せようが、懐合の都合がわるいからネ、
夫人は微笑しながら、夫の言葉を誠と聞かぬ樣子でした。
第二にネ、其策は上〱とはいへないから、先づそれ程眼立ぬ樣に、眼だゝんければ彼方でもこつちへ對して氣の毒さが尠ないといふものだから、何かにつけて生計を少しづゝも樂にして遣うと思ふのだ、たとへばネ、このルーセが學才のあるなしを見定めて、一年か二年も學校通ひをさせて遣り、其中外の子供たちが相應な年になつたら同じ樣に世話をして遣つても好ではないか、マアそれに限つたこともない、何處の爲にさへなれば、なんでも管ふとはないのさ。
併しあなたたつて老少不定で、何時先へ入つしやるか分りませんでは有ませんか。
それは僕がさうなつて出來んければ、あなたがするさ、僕はあなたに其役を讓つて少しも不安心はない、それで僕等二人が過去つたあとはチャーレやヘレンが二人の仕殘しをするが好ではないか?

# 家政

## 家內重寶錄

ふみ子

### ○饅頭製造法

先づ糯米一升を飯に炊ぎ、別に麴二合を水一升に加へて能く攪和し、之れを布袋に入れて漉し其米を去り、而して其花汁を桶に移し入れて前に炊ぎ置たる飯を投じて一夜を經れば、則ち醴となるべし。夫れを搾て糟を去り此の醴酒を用ひて麥麪を捏ねて餡を包み、焙籠に盛りて熅むれば、則ち膨脹すべし。之れを再び蒸籠に入れて蒸せば即ち饅頭となるなり。

### ○ぎうひ製法

葛の粉、蕨粉各一升に、清糖一斤を共に攪和して能く混合し別に糯米二升を用ひて水に漬し、臼に磨りて濃きしろみづと爲し前の三味の細末を投じて文火に上せて之れを煎じ、木箆を以て徐々に攪拌し、煮詰めて半日許りを經れば、漸く減じて七分に至るべし。此の時別に水飴二斤半を投じ、再ひ煎詰めて半分を減ずるに及んで火より下し、麪粉を板盤に撒き移

して之れを擴げ、放冷すると二三日間にして、切て方形となし麪粉をまぶして磁器に盛れば茶用の菓子となすに宜し。

○生魚を貯ふる酢の法

酢と酒と各等分、之に適宜の鹽を交ぜて之れを煮立てゝさまし置き、生魚並に生の貝類を之れに浸し置く時は、切目正しくして何日迄も損ずることなし。夏日などは遣ひ餘りなる生魚を之れに投じ置き入用の時出して用ゆれば甚便利なり。暑氣烈しき時にても、二十日位は保つべし。

山芋、自然生を結ぶには、之れを細かく切り、酢に暫く浸し置き取出して結ぶ時は、如何樣にも結ばるゝなり。

馬鈴薯飯　薯を能く洗ひ之れを三四分に刻み、水に浸すと半時間許にて引上げ、炊ぎたる米と共に煮て食する時は味甚佳なり(但適宜に鹽加減すべし)

馬鈴薯汁粉　馬鈴薯を蒸し、熱の冷めざる内に皮を脱し磨り潰し、之れに食鹽と砂糖とを適宜に加へし汁と爲せば、其味頗る宜しく、小豆汁粉を代用とするに足るべし。

馬鈴薯味噌　馬鈴薯を煮て上皮を剝ぎ、之れを臼にて搗き砕き馬鈴薯一〆目に麹六合食鹽五合大豆二合五勺の四種を能く混じ桶に入れ置けば十五六日にして食用に供するに宜し。

馬鈴薯煎餅　澱粉一升に炭酸曹達少許、玉子の黄身三四個白砂糖二百五十匁の割合にて混和し、泥狀になして煎餅型に入れて燒くなり。

馬鈴薯羊羹　薯一升に能く煮たる白大角豆三升を混じ再び之れを煮て能く漉し餡となし、之れに寒天十本に水一升を加へ煮て、白砂糖四斤に右の餡を加へ又之れを煮て充分混和せしめ其儘箱へ移し置き冷めたる後適宜に切るべし。

○小袖簞笥半櫃などに脂出るを防ぐ　檜の木にて造りたるものは脂出ると多きものなり。之れを其儘用ゆる時は、衣類など入れたる后に脂出で着物を損ず。故に檜にて造りたるものは、其新しくして未だ用ひざる前に、藁を入れ置き、其藁に脂付きたるを取去りて後衣服を入るべし。然る時は決して脂に汚さるゝ虞なし。

○塗もの、漆臭きを去るには其器物をば、豆腐糟の中へ一夜埋み置くべし。臭氣去るなり。

○炭を用ゆるに、最初暫く水に浸し置きて後日に乾かし而して用ゆれば、火の粉飛ばずして宜し。又手に觸れても手を汚さ

ず、數奇者は往々此法を用ゆ、殊に飛んで火を誤る炭などは必斯くして用ゆべきとなり。

○飯をたくに、始め火氣の通らざる間は火を強く焚くべからず、若し強く焚くとも徒に薪を費すのみにて其詮なきとなり。故に火氣釜の内へ通りたる時に方り、強く焚きて能く煮上るやうにすべし。又煮上りたる後は寬やかに焚くを宜しとす。斯の如くする時は薪を費すと少くして、しかも好き飯を得らるゝあり。

○旅にて寐間へ人の來るを防ぐには、人の氣付ざるやうに、戶又は障子のあとに毛錐子をもみ込み置くべし。凡て旅中には懷中きりを用意し置べし。事に處して用多きものなり。

## 茶話會

○何事にてもものを爲すに、今日せずとも明日出來るといふて切迫するまで延び〳〵にする癖の人あるものなり。是は誠に悪しき事にて、かゝる人はいつも心落付ず、用事も絶て片付く事なきものなり。夫よりは明日にても宜しき事をも、今日若し暇ある時は之れを爲し置くやうにする時は、いつも仕事の順序能く調ひて、假令不時の出來事ありとも、幾分か其混雜を寡くするとを得るものなり。秀吉の歌に

武邊をば、今日まで明日とおもひなば。人におくれて耻の鼻明き。といへるあり。事を勉むる人は、常に心掛べきとなり。

○子を育るに、其惡しき處を姑く宥して、其善き所を擧げて、之れを奬勵すること肝要なり。子供は素と無邪氣に、素直なるものなれば、譽らるゝとを喜び隨て其一度譽られし事は幾度も之れを爲すに至るべければ、譽るに從ひ善き所長じて惡しき所日に少なくなり遂に善良なる人となるに至るべし。之れに引替へ惡しき所をのみ折檻して、善事を賞揚せざれば、却てねぢけ者となるなり。是子を育つる人の注意すべき事ならむ。

## 田家のこよみ

畜勳子編

○大寒一月廿日　○欵冬華　○水澤腹堅　○雞始乳
○立春二月三日　○東風解氷　○黄鳥睍睆　○魚上氷

○一月廿日より二月五日まで、農事園藝

○壓條　とり木は、薔薇の類、及び果木類は此節より二月下旬迄をよしとす、其法は木の枝に少しづゝ疵をつけ撓めて竹を添へ、堅く結びつけて后、土を掛けて埋む、斯くすれば忽ち疵口より根を發す、夏の土用に至らば、枝の元よりきるべし、而して本地に植へ換ふべし、但し親木より一時に切る時は、稍もすれば枯死するとあれば、半分づゝ二度に切る法安全なり、又皮を剝ぎ置くもよしとす、

○一月廿日より二月五日まで、農事手當

○牛羊豚　は務めて其厩を温暖清淨にすべし、温和の日には正午より二時間ほど舍外に出して運動せしめ、其間に掃除をなし、然る后靜に舍内に入るゝべし。但し肉用畜類は成るべく外に出すべからず。

○家禽　家禽の種卵は此季節に往々氷凍し易すければ、箱又は張籠の中に籾ぬかを敷き詰めて、鈍端を下にしてならべ置き、其上に亦籾糠を澤山に覆ひ置き成べく温暖にして空氣の通ずる處に置き、務めて動搖せざる樣すべし。余先年或人より知らずして氷凍せし卵を得て、數羽の母鷄に抱かしめたるに、一羽も孵化せざりしとありき、能く注意すべし。

○家禽の孵化期　は將に此節より始む、夫より春の彼岸に至る迄を最上さす、若し此季節を失なふ時は到底完全なる種禽を得ると難し、家禽飼養者は可及的力を盡し成べく此季節をはずさず孵化せしむべし。

○園藝法

第一　萌芽發生の解

萌芽に、葉芽、及び花芽の二種あり、葉芽は通常發生して枝條さなり、花芽は通常發生して果實を結ぶ、葉芽は細長形にして多く鋭き尖端を有し、花芽は其形狀圓圓になるを以て、之を容易に鑑別するとを得べし、穉樹の生長活潑なるの間は萌芽皆葉芽にして毫も花芽を生ぜずさ雖ども、樹木の漸く老成するに從ひて養液管の分脈繁雜を加へ、其交通愈よ緩慢さなり、且木体中種々の變化を生じ爲に津液の環流疎遠ならしめ、此に至りて始めて花芽を生ず、而して花芽の生長に欠くべからざるものは類化せる營養液之なり、粗液の昇流活潑なる間は、其孵化不充分なるが故に葉芽の生成を促すとなし、此故に葉芽は生長迅速の結果にして、花芽は生長緩遲の結果なり、花芽の生長するや其狀態同じからず、或は葉芽より發生せる小枝の生長不充分にして花芽を實擔するに至るものあり、或は葉芽中の榮芽變じて花器官となり爲に葉芽の直に花に變ずるとあり

# 理學

## 大風と指物屋

苜蓿の播殖には蜂の多きを要す、試みに二十株の和蘭苜蓿を植ゆるに、蜂の來るあれば二千二百九十粒の種を出す、之に反して若し蜂の來るを防がんには一粒の種をも生ぜざるなり又赤苜蓿は百株より二千七百粒の種を出すも、蜂の來る事なければ又一粒をも生ぜざるなり。赤苜蓿に來るは只土蜂のみなれば、土蜂にして失する事あれば赤苜蓿の種は絕ゆるに至るべし、日本の　に大風と指物屋の關係あるを云ふ、生物界にも不思議なる關係多し、前述する如く赤苜蓿に來るは只土蜂のみなるが、土蜂の巣を害する者は野鼠なれば土蜂の數は野鼠の數に比例す、而して野鼠の數は勿論猫の多寡に依るなれば、苜蓿の播殖は明かに猫の多寡に比例するものなりと、ニユーマン氏の經驗なり。

# 通信

談海子編

## ●高知通信

◎土佐女學校　は本年九月より學科に改良を加へたりしが、又た今般同校卒業生其他の有志婦人の爲めに、一層高尙なる學科を授けんが爲め、新に高等科を設け、英文學、漢文學、和文學、歷史科、經濟科等、の諸學科を教授する由、新來の米國婦人ヒユーストン孃は、去る十一月より授業に從事せらる、同校は去る廿三日にて、本年第一學期の試驗を終り、翌日クリスマスの祝賀會を催ふせり。

◎本年通常縣會　に於て尋常中學校女子部を廢し、廿六年度より高等女學校を設置する事を決議せり、經費八百餘圓と聞けり。

◎高知女子傳道學會　本年秋期入學生は十名斗なりし由。

◎高知育兒會　同會附屬產婆學校生徒中、本年下半期試驗に及第せし者五名に卒業證授與せり、又た本年入學志願者は六名なりと云ふ。

◎中村手藝傳習所　に於ては、本年十二名の卒業生を出だし、過日卒業證授與式を擧行せり。

◎醫師の數　最近の調査に係る、高知縣下醫師の數は、從來より許可六百七十六人、內務省達乙第四號に依り、許可醫七十六人、卒業醫十一人、受驗醫百四十八人、履歷醫十人なり、又た藥劑師は廿七人、藥種商は百二十三人なりと云ふ。

## ●山形縣米澤市通信

◎米澤婦人矯風會　每月第二水曜日午後六時より、英和女學校內に開かる編物の教授矯風に關する演說等あり、會長は子爵松平夫人副會長は山鹿牧師老母なり每會集るもの四十余人なり。

◎英和女學校　メソチズト教會の設立せるものにして、生徒六十余人、教師は、ミスアンキンソン、ミスインホープ、佐藤姉、松浦氏、櫻氏等なり。

◎米澤婦人會　日本基督教會信徒、子爵松平夫人、及び上杉夫人等の盡力に因て成れるものなり、會員十四五人互に婦人社會に傳道するを以て目的とす、每月第一第三の土曜日午後七時より、松平上杉二氏の宅にて交る〳〵開會す。

## ●越前通信

◎高等女學校　昨年中學校女子部より分離獨立せし高等女學校は、今度縣會にて其經費を增加して教員を增聘し、且つ增築する事に決議したりし縣下女學の爲め祝すべき事にこそ、又同校現在の生徒は六十余名なれども、百名迄增募する由、同校の授業料は平均一ヶ月五十錢なり。

◎小學女教員　福井縣下の小學女教員は四十名あり、前年より十四名增加せり、尙追々增加の模樣なり。

◎羽二重織　福井地方の特有物產なる、羽二重は、近來長足の進步を爲し、一ヶ年四百萬圓の產額に及びたりしが、女子適當の職業にて七八歲の兒女より其業を見習ひ相當の賃錢を得るを以て、少く財產あるものは自ら機業を始め、其妻女をして機杼に從事せしめ、貧賤なるものは其妻女を他家へ雇はれしめけるゆへ、同地方にては下婢雇入に困難する程なりと、而して該職工女の賃錢は多きは一ヶ月七八圓、少きも三圓乃至一圓四十錢位なりし。

◎新知事の矯風意見　前福井縣知事牧野伸顯氏は流石に故大久保內務卿の遺子たるに背かずとの評判ある政治家なりしのみならず、品行方正にして一滴の酒を飮まず、縣下の風俗上に銳意盡力せられしも、其効未だ半ばならざるに、端なく茨木縣知事に轉任せられ、荒川邦藏氏內務省より本縣知事に來任せしが、氏は可なりの飮酒家なりと、矯風的の施政果して牧野知事の相續人たるを得べきや、通信者は偏に今後の擧動を卜せんとするものなり。

## ●宮城縣通信

◎松操女學校　仙臺市元荒町松操女學校にては、客臘廿四日、高等科十六名へ卒業書を授與せられ、本縣廳より臨官せられたりと。

◎慈善　山口少將の令夫人は、仙臺市新小路の貧民、武井三原の家族へ金一圓を惠與せられたれば、同家族は感淚に咽び居れりと云ふ。

◎身華私塾　同塾(女學校)は普通科五十二名の內より、客臘廿六日卒業式の際、全科卒業生十二名を出せり。

◎產婆會　去る八日東三番町五城館に於て、仙臺市內產婆會を開かれたり、出席員は四十有余名なりと云ふ。

◎女子職業學校廢止　仙臺市大町一丁目志賀知子設立に係る、同校は此程廢止を屆出せり。

◎貸座敷娼妓の數　當縣管內の貸座敷營業者は六十名にして、娼妓の數は四百九十三人にして、內仙台市に於ける數は、百八十人なりと。

◎孝女　家貧にして孝子顯はる、當市東二番町一番地靑山榮太郎の長女祝は二八の妙齡にして、少しも輕薄の擧動なく、晝は女髮結に得意に廻り、夜は裁縫をなして一家の活計を立て居るは孝女と云ふべし。

## ●朝鮮通信

在仁川港　靑山好惠

◎王妃殿下と日本婦人　朝鮮男子及婦人は、西洋婦人支那婦人等を忌み嫌ふのみならず、之れを恐るゝに引き換へ、非常に日本婦人を敬愛するは、當國に於て我々日本人の尤も愉快とする所の一なり、而して王妃殿下が日本婦人を愛好し玉ふとは、亦格別なりとす、左れば事ある每には駐在外交官の夫人達に謁見を賜ひ、種々の御談話に御下賜品あるとは屢々にして、御居室の如きは多くは日本婦人の

居室の詠義に彖ざり居り玉ひ、日本婦人に面し玉ふ毎に日本に於ての婦人社會の有樣を聞くを切望し玉ふなり、一身殆んご韓廷の重きをなし居る、王妃殿下の此の好みを利用せば、日本婦人等此國に偉業をなすを決して難しさなさゞるべし。

◎杉村夫人以下の謁見　先頃の王妃殿下の御誕生節に當り、杉村領事夫人(Ｅ子)及小川、新庄、國分三書記生夫人さ都合四名の方々には、王妃殿下の御召に依り、參內謁見種々なる御饗應を受け、天樂を陪覽し殆んご八時間餘の後殿下を辭して歸館したり。

◎米國公使の令孃　在京城米國公使チーガスチン、ハード氏の令孃(十九歲)は愈々明春現任清國北京駐在獨逸公使、フチン、ブランド、氏(七十餘歲)さ結婚する由にて目下準備中なりさ聞く。

◎スクラントン女史さ日本女學生　在京城米國メソヂスト教會附屬女學校々長さして働き居らるゝ、スクラントン女史は大に日本少女子を愛し、曾つて一少女子を已れの實子の如くに養ひ居られたり、女子の名は中村ヲカさ云ひ本年十五六歲なるべし、女史が右中村ヲカ子を其の父より行末の事萬端を打委れたるは四年程以前なり、女史は甚だ此の女子を愛し、英、韓語學を修學せしめたるに、素さ利發の性なれば三年程の後には、韓、英兩學共非常に上達したり左れば女史は益々之れを愛し、米國に連れ歸らんさせられたり、然るに中村ヲカ子の一家の事情より止み難き事出で來りて其父より暇を乞ひたるより、女史には遺憾なれごも致し方なく遂に乞ひを許し、ヲカ女さ別れを惜みて日本に歸へり、今は長崎の活水女學校に修學し居るさ聞く、スクラントン女史には右のヲカ女を失ひてより大に落膽せられ、其後此れに代る一女子を得て教育せんさし居らるゝも未だに得ず、先日仙臺の島貫氏來韓し、同女史に面會せられたる時も右の話あり、余の如きも亦一少日本女子を得るとの周旋依賴を受けたる一人なり、暗き朝鮮の野に主の道を宣べ傳へんさの志願を抱かるゝ　日本の姉妹達には、同女史の如きは風强なる助けならむ。

◎仁川及京城に於る三日本婦人　仁川及び京城等に在留する日本婦人は、凡そ千百八十餘人なるが、其中に就き余は三の秀でたる日本婦人を見る杉村、能勢、古城三婦人なり、杉村夫人は京城日本公使館書記官兼領事、杉村濬氏の令孃夫人にして、Ｅ子さ云ひ芳齡今年廿三四歲なるべし、能勢夫人は仁川日本副領事能勢辰五郞氏の令夫人にして、名を錦子さ云ひ、東京市會議長楠本正隆氏の令孃なり、古城夫人は前仁川日本公立病院長曾當氏の令夫人なり、何れも皆才學秀でたる貴女にして、在韓日本婦人の代表者さして朝鮮婦人に對せらるゝに於て、毫も愧づる處なかるべし、而して杉村夫人其溫良を以て優り、能勢夫人其の學識を以て優り、古城夫人は其の交際に巧みなる所を以て優れるを見る。

◎在留日本婦人の種別　仁川及京城に在留する、日本婦人千百八十餘人を概別すれは四十餘人は洋妾なるべし、百餘人は酒居の酌婦或は賣娼婦なるべし、殘數の十分の一は老婆若くは無職業女なるべし、十分の五は娘なるべく、十分の四は妻君なるべしさ思はる。

◎美女を軍艦にて送る　朝鮮の妓生さ稱する者は官妓にして、何れも十四五歲より二十二三歲迄の美女なり、直に國王に面して、萬事周旋し得るなり、中々に威勢强き者にして、位昇き官吏は之れに向つては平身低頭せざる可らず、各道監吏は大概此の官妓四五十名を蓄ふ、中に就き平壤の者は特に美麗にして、宮中に大典ある每に必ず平安道より、遙々召されて宴を周旋す、先般の國王登極三十年祝典の際にも、亦六名を召されたるが、今般平安道平壤に歸るに付き、國王は特に令して朝鮮政府の軍艦海龍號にて送らしめらるゝとさなり、同艦は近日出帆の筈なり。

## 女報

淡海子編

●皇后陛下　謹んで宮中新年式の御摸樣を承るに　皇后陛下は白地へ白にて高縫せる花唐草の御上衣に 薄花色繻子地へ菊花を糸さ金にて縫したる御裳の御服にて、勳一等寶冠章の綬御佩用遊され徐々さ、鳳凰の間に臨御あらせ玉ふ　兩陛下に扈從し奉りたる宮方には、有栖川熾仁親王殿下陸軍大將の御正裝に大勳位菊花大綬章、同御息所董子殿下、同若宮威仁親王殿下には海軍大佐の御正裝に菊花大綬章、憲法發布紀念章御佩用、同御息所慰子殿下には薄水色繻子の御上衣に濃萌黃天鵞絨の御裳の御洋服を召され閑院載仁親王殿下には騎兵中尉の御正裝に菊花大綬章、同御息所智惠子殿下は白地に精好地の御上衣に金の花摸樣に緣は白駝鳥の羽毛もて飾れる御裳の御服、小松若宮依仁親王殿下には海軍少尉の御正裝に菊花大綬章、同御息所八重子殿下には白地繻子の御上衣に金の花唐草摸樣に白駝鳥の羽毛の緣を付したる御裳の御服裝にて麗々さして、兩陛下の御前に御整列あらせられ北白川、伏見兩宮殿下には御不在にて御欠席次に土方宮內大臣、鍋島式部長同夫人、式部官德川侯爵(篤敬)同夫人、花房宮內次官同夫人、式部官前田侯爵同夫人、三宮式部次長同夫人、其他宮內省親任官公爵從一位勳一等及一等二等官同夫人、何れも麗如さして御前に進みて拜賀をなし御式了りて　兩陛下には一旦御內儀に御還の後再び正殿へ出御遊さる。(日本)

●皇太后陛下の御入浴　皇太后陛下には寒中御保養の爲め、此程より大磯海水を日に一石五斗以上滊車にて取寄させ給ひ、靑山御所にて御入浴遊ばさるゝやに承る。

●皇后陛下　は東京慈惠醫院入院患者の極寒の爲に一層困難の者も可之有さ、御擴靈敎爲遊明十三日、思召を以て別項の通冬服五拾枚下賜の思命ありたる由　陛

下の御仁慈なる下民を、御慈愛遊さるゝの懿旨之を拜承するもの誰か感激せざらんや。

一二ヶ子繻　五拾反　一木綿裏地　五拾反　一金拾五圓　裁縫科

寒氣之砌に付　皇后陛下其院患者之狀况を被爲　思召前記之通賜り候間可然御取計相成度此段申入候也

明治二十六年一月十三日　皇后宮大夫子爵　香川敬三

東京慈惠醫院長高木兼寛殿

●九條家の結婚式　豫て約束調ひ願濟となりし九條道孝公の男道實氏と大谷光瑩師の息女惠子との結婚式は愈々來る廿一日東京の本邸に於て擧げらるゝ事に取極りたるに依り惠子の方は來る十五日頃東上せらるゝ由。

●師範學校女子部廢止の流行　近來地方議會に於て、尋常師範學校女子部廢止論を唱ふるもの續々ありて、山口廣島兩縣會は已に之を議決し、京都府は之を調査委員に附托し、鳥取嶋根富山三縣にも廢止說に就て激論を唱ふるもの甚だ多く、其他各地方往々此等の議論を唱ふるもの少なからず、近來の一奇聞なりと云ふべし、今其の原因なりと云ふを聞くに、一半は地方政費節減の爲め、一半は女生徒他に醜聞多き爲めとに依るものゝ如く、中には地方稅を以て教育したる女生徒他に嫁して教育に從事するを不都合なりと論ずるものあり、又或は女子部所在地の子女にのみ便利ありて縣下一般に餘澤を及ぼす能はずと唱ふるものもあり、斯る薄弱の理由の爲めに女子部を廢するは惜みても猶ほ餘りあり、兎に角地方教育上に取りては捨置き難き問題なりと云ふべし。

●上毛婦人教育會　同會の例會は豫時の如く去る八日午前十一時より本願寺に於て開きたり、會する貴夫人令孃六十有餘名席定るや、小野嶋氏開會の趣意を述ぶ、次に若井、深町、井村、篠原、中尾の諸氏交々起て新年の賀辭及び懇懃なる挨拶あり終りに臨て、師範學校長は、婦人德育上の件に就て懇切丁寧に一場の演說あり、終て喫飯に代て折詰のすしを配り、夫より餘興として以文會より福引の寄附あり、而して茶菓の饗應ありて、和氣靄々の中に散會せしは午前二時過る頃なりき。

●手藝奬勵品展覽會　上毛婦人教育に於ては、會員の手藝奬勵の爲め、品展覽會を來る二十一日、二十二日、三十三日の三日間午前九時より午後五時まで臨江閣に於て開く、入場券は成立舍に於て取次を成す、一枚金五錢なりと聞く處に據れば同會の手藝品は、一大進步顯し見るべきもの夥多なりといへり。

●故德川直子の葬送　本月一日遊去せられたる、舊一橋藩華族伯爵德川達道氏の御隠居、直子の方の遺骸は、去る十二日午後一時、市谷加賀町の邸を出棺し、上野公園淩雲院へ葬送せられたり。

●故ウエスト孃の遺骸　同孃の遺骸及び米國公使クームス夫人の一行は去る八日無事桑港に着したる由。

●奇怪なる投書　『去二日一紳士の外國貴婦人を北廓に案内しまはりたるものあり、廢娼壯年義會員其誰たるを異みそれとはなしに護衞し來りたる巡査に向ひ漸くにして其與へたりと云ふ、名刺を見たり署す、式部次官三宮某とア丶堂々たる日本の貴人にして、我が最醜所を外國貴婦人に見せしむ、事少なりと雖一國の躰面を重んじ、一身の地位を重んずるもの丶忍んで爲すべき所ならんや』と投書し來るものあり、吾人は何事たるを知らず、又其信僞を知らず、(國民)

●廢娼會員の義捐　山梨縣西山梨郡淸田村窪田某は、身の薄命と共に細き煙を立て行く內、昨春より最愛の妻子に病床に打臥され、男一人の手にて多くの子供の世話を爲しながら、其口〳〵を送り來りたるもの丶固より聊かの蓄へとてあらざれば、殖へ行く者は負債のみにて、昨年の暮頃には行く年を送りて、又來る年を迎ふる支度もなりがたく、隣家の餅搗の音を聽きては頑是なき子供等が右左りより袂に取縋るを見るさへ腸の斷るゝばかりなるに、大病人の妻は思ふやう手當もなりがたければ、途方に暮れて止むなく、次女に納得させ娼妓出稼の手續をなしたり、之れを聞くや、同村の廢娼會員、內藤文次郞氏が訪れ往きて、懇々其の不心得を說き、一家の負債は自分が一手に引受けんとて、早速娼妓出稼の前約を破談せしめ、一家をして安心に正業に就かしむるの途を與へたる由山梨新聞に見ゆ。

●娼妓の仕入　此程麻植郡の各村へ大坂松島の某樓主なりとて、娼妓の仕入れに來り居れるが、年齡十五才より、二十三才位までにて、大低三年の年期にて三十五圓位にて約束するより、頻りに其約束をなすもの多く、旣に牛島村にて、三人森山村にて、四人鴨島村にて、五人西尾村にて、二人桑川村にて、二人の約束出來たりと云ふ、元來松島の娼妓は、其數三千にあまり、內にて紀州產のもの、第一に多く、第二には德島產なる由、本縣の婦女が斯く他國へ出でゝ醜業を營み本縣を以て娼妓出地の、第二に位せしむるとは誠に歎はしきとなりかし(德嶋)

●高知婦人實業會　の贊成員及び生徒には、一月五日年賀の爲め一同同所に相會し親睦の爲め福引の餘興を催ふし、又仝會にては本月初旬より、愈々機織場を設置せんとて、高知製藍會社役員共が出張して、夫々準備中なりと聞く。

●女子手藝研究會　備前國邑久郡の裁縫教員は、豫て裁縫研究會なる者を設置し居りしが、今度朝倉力治、結城小彌太兩氏の發起にて、舊冬十一日高等邑久小學校に於て、仝郡公私立裁縫教員三十九名の集會を催ほし、私立邑久郡女子手藝研究會なる者を設置し、役員を撰擧したるに、會長には結城小彌太副會長には窪田いせ、幹事には岡崎きく、神長、林まき、岡田松野、延原やう、小幡ふさ氏等當撰し、尙總理の撰擧は後會に讓り、又部長は不日各部に於て撰擧する都合なりとぞ。(山陽)

●東湖先生の夫人逝く　東湖先生藤田誠之進氏の夫人里子の方は、本所なる先生の令嗣健氏(諸陵助)の許に在りて先頃より、病に惱み居りしが、客臘二十三日遂に八十二歲を一期として長逝せられたり。

●女子高等師範學校長　從來奏任校長なりしを今度改めて勅任さし高等師範學校さ同樣ならしむる由、右は學科の程度上最も然るべき者なれば、文部省の議は已に一決したるを以て近々河野大臣より該議を內閣に廻すさ云ふ。

●ルーメニア皇后、敎員檢定試驗を受く　今のルーメニア皇后は、最も公會演說に妙を得給ふ由にて、是まで宮中に國內貴顯の令孃達を集めて、常に文學の演說をされし事數々なりしが、此の會は追々盛大に赴きぬ、又皇后は、高等女學校に於て右の文學會を開き生徒に演說するこさの便利なるを悟り給ひしも、如何にせん何人たりさも國王及び文部大臣の與へたる敎員免許狀なくては、同校生徒に演說するこさ叶はぬ掟なるにぞ、皇后は自ら進んで敎員の學力檢定試驗を受け給ひ見事に登第したれば將來每期數日間同校の演說に從事し給へるよし。

●喫茶店に日本女子　東洋美術の粹抹茶の妙技を演ぜん爲め、二三の溫秀貞淑なる女子を撰拔して、其席に侍せしめんさす、吾輩は唯だ其可なるを見る、未だ其不可なるを見ざるなり、農商務省若し之をしも禁過せば、到底柱に膠して株を守るの誹りを免れずさ云ふ者あり。

●御結婚　エデンボロー公女さ羅馬尼フハーデナンド公さは、愈御結婚あらせられたり。

●我醜業婦人シカゴに入り込む　北米ヴアンクーヴア新聞の記す所によれば、我醜業婦人二十二名去十一月監視の眼を潛りて、米國に達したり、右はシカゴに赴き同地の魔窟に於て賤業を營む筈なりさ、大博覽會の眼合を目當にしての業なるべし慨す可き事共なり(國民)

●世界博覽會婦人出品部長　カルノー大統領夫人は、閣龍世界博覽會佛國婦人出品部長たるこさを承諾せりさ、十二月七日巴里發の電報に見ゆ。

●グラッドストーン夫人　は猶夫君翁の如く活潑々たり、夫人齡既に八十に達すれども未だ眼鏡を用ゆる事を知らずさ其の眼光甚だ鋭く處女の如しさ、アンドリュー、クラーク氏云ふ夫人は偉大なる老婦人なりさ。

●蘇格蘭のグラスゴー　にては婦人の地方議役員撰擧權を有するもの一万五千七百四十人ありさ。

●エドワード、ヘール師　はウヰランド孃を以て欽選詩宗さすべき旨を說けり、師はボストンの新聞に論じて曰く、女王は宜しく婦人を以て欽選詩宗さすべし、女王ウヰクトリヤは、英國の婦女にして王室を崇尊し當代の文學を以て特殊のものたらしめしものを擧げて詩宗の任に當らしむべし、而して其人は實に此のウヰラード孃なりさ。

●マウント、ホリヨーク大學

ホリヨーク大學さは何ぞ、此れ現今世界に有力なる働き人を出せる神聖なる大學なり、其の創立者は誰ぞ、此れ世界に名高きメレー、ライオン女史なり、女史の本校を創立せる實に千八百三十七年十一月八日なれば、本年同月九日の記念會を開き幷せて新設せる科學講堂に首石を納むるの式を擧ぐ是より先き同校の科學教授大ひに進步し、現在の建築に不足を生ぜしかば爰に同校の同窓會は發起さなり新たに講堂を建築する事さなり、費用は四万弗さ定められたり、其內一万五千弗は既に同會に於て徵集し、猶一万五千弗は同會が年々支出し殘り一万弗は有志家の寄附を仰ぐ事さなし、終に同日首石を納むるの運びに至りしなり、同日ボストン、スプリングフヰールド、アムホルスト等より集り來る學士博士教師等頗る多かりき、開會に先立ちて博士ヒッチコック氏は當日より同校を以て單に學校さ呼ばずして大學校さ稱すべき旨宣言せり。

同日午前の集會は講堂に於て開かれ、校長ミード夫人司會をなし、ボストンの博士スミス師聖書朗讀幷に祈禱を捧げ、次でベロイト大學の教授ブレイスデル氏は立て學校に於ける教授の讚勢力を論じ幷せて專門普通兩教育の必要より兩者の互に相待つて進步すべきを述べ、進んで個人の勢力の何れに在るやの問題を出し、メレー、ライオン女史、トマス、アルノルド氏等の道義の基礎の上に立ちしを以て其の勢力ありしを擧げ人は天さ神さに親近して後始めて力ある者なりさ論結せり。

之に次てライオン女史の教授を受けしブラックウエル夫人は女史教育の困難なりし來歷を述へ、アムホルストのヒッチコック氏等も各々女史に關して述ぶる處ありき。午後は即ち首石奉納式にして、銅製の箱に學校の來歷書、同校五十年間の規則一覽、學校の寫眞等を納めて地下に入れ、校長ミード夫人式を司り、ボストンのクラーク氏はライオン女史の貴んぜしものゝ內科學は聖書に次ぐものなりきさ述べたり。

講堂の構造。氏の新講堂の大サ幅六十五呎長サ百九十呎、地下の室を外にして三階の建築なり、地下の室には諳誦室あり物理化學の器械室あり、同室實驗等あり此れ等の室は諳誦室を除くの外盡く三和土を以てなれり。第一階の入口は西面の中央にありて、其の左の第一にあるものは讀書室なり、其の後に休憩室あり、續いて理科教頭の別室あり、右には幅三十呎長サ三十四呎の物理學講義室あり、其の後には裝置室あり續で光學室あり其の東端に電氣學室あり、中央に一大室ありて之れより上下に通ず、二階の室は讀書室、書籍室を除くの外悉く高サ十四呎あり、第一階の物理教場の上に當りて化學講堂あり、之れが前後左右に器械實驗室化學科教頭の別室高等實驗室等相ひ並列せり、第三階には大實驗室、化粧室等あり、最下の室より此の大實驗室に至るに昇降器あり、以て器械の運般に便にす。講堂は外形も閑雅にして趣味あり、設計精員に經驗ある人の手になれりさ。

# 孤兒之友

## 博愛社孤兒院

杳勳子編

此頃播州博愛社の狀况を聞き、轉た同情の念禁ずる能はず、同社長小橋勝之助君の宿痾は深く我同志の憂慮する所なり、昨年初夏の季、北海道慢遊の途に上られたるが如き、君を知る者に於ては實に非常のとなりき。君も亦深く決心して再び歸社を期せずと謂へり、幸に恙なく慢遊を終り歸社せられたるは誠に天惠の擁護と云ふべし。然れども君が慢遊中、播州赤穗郡は未曾有の水害にてありき、爲めに損害を蒙りたると尠小にあらず。又是迄同社に多少の借財もありたるが、舊冬同社所有の田地山林の幾分を賣りて、其借財を悉く償却せられたれば、本年より同社の年入の上にも又影響の來るべく。加之是迄岡山孤兒院より幾分の補助を受け居られけるが、事情ありて、之を受けざるとゝなれり、爲に一入困難なるべきを知る、斯かるとは兎もあれ。小橋君が宿痾は彌よ重きに至るは頗る憂慮にたへず。過般來博愛社の實况を報ずる者ありて、吾人略ぼ其狀况に詳かなるも、餘り吹聽するに似たれば憚かりて猥りに我紙上に登載せざりしも。今回在大坂阿波松之助君より、同社の窮乏を報ぜられたれば、聖旨一度垂れ事此に及びたれば、是を自から憚かりて隱蔽に附せんは反て聖旨を蔽ふに似たりと信ずれば、今玆に阿波君の寄せられたる全文を揭げ以て、博愛社が如何なる運命に際し、其堅信雄乎なる、畢に讀者同情の諸君の反考に任ぜん耳。

謹啓孤兒のため御勤勞の段感謝致候去日小橋勝之助君より來狀あり窮乏を訴へられざれば思ふに其困難は岡山に劣らざるべしと存候定めし貴方に未だ該社の事情御承知なきなれば殘念に存候故左に御通知申上候。

博愛社は農を以て本とし孤兒をして此道により獨立せしむるに在り。

廿五年中は實に試煉の年たり。

水害を蒙り　疾病に侵され。

經濟一層の難を訴へたり。

蓋し從來同社は岡山より補助を受け（農林の收益を費消し盡したる外の分）たりしに岡山は昨七八月頃より非常の困難となり遂に博愛社を助くる能はざる狀に陷りたれば是れ全く額に汗して食するの眞理と實行すべき聖旨なる事を信じ一統奮勵して獨立の方針を採れり。

廿六年は尙一層の難あらんとを豫期せられ候其經濟の困難なる事想像しがたからんと存候。

扨亦小橋君は宿痾相發し病床に臥せらるゝ處なれば實に同社の爲に特別の恩惠を祈らざるべからずと存候同君は素より吹聽なされたき精神にてはあらじ去れど之を承りたる者いかで默すべけんや。

來月中旬には小生も同社及び岡山を訪問いたし聊か將來のために計る處あらんとす。

右要略貴報まで草々不備

一月九日　　阿波松之助

藤井米八郎様

又爰に小橋勝之助君より來翰ありたり、其書素より一個人に宛てたるものなれども、今序の故を以て、全文を掲ぐることとなせり、讀者請ふ幸に之を諒し給へよ。

謹賀新年。昨年中は一方ならぬ博愛社の爲めに御盡し被下奉謝候。尚本年も不相變御盡力の程是祈候

明治廿五年は博愛社の試煉の年にして實に緊雑困難を究めたり然れども主の御惠みにて年末に至り漸く事務其緒に就き先づ安堵仕候然れども。

明治廿六年は迂生の肉躰の生死の定まる年と感ぜられ候又經濟上に取りても最も困難なることゝ被存候充分なる覺悟を以て明治廿六年を迎へ申候。

迂生社員と共に天父の祐助とキリストの誘導の下に十字架を負ひて孤兒實業的教育の唯一事を務むるの外他事なく候。

一人の父母なき寄るべき親戚なく又尺寸の財なき憐むべき孤兒を救濟し之を教養し靈肉を健全に達發せしめ職業を授け身を立て家を起し世の益をなすに至らしむるは實に一大難事なり孤兒實業的教育の事業容易のことに非ず殊に實業を働き其收益を以て彼等を教養するとは甚だ困難なり然も人の目に困難と見ゆるとも神の前にげ至て易々たることなり故に我等希望に充されて神の武具を鎧ひ背水の陣を敷き信仰の善き戰ひを戰かはんと一同奮發罷在候願ば我等の爲めに常に御祈り被下度候匆々頓首

明治廿六年一月一日　　小橋勝之助

## ●孤兒の友取次義捐金第六回報告

金貳百三拾三圓八拾七錢九厘　第五回迄各孤兒院寄附高

| | | | |
|---|---|---|---|
| 金壹圓九拾五錢 | 長崎 | 婦人祈禱會 | 孤女學院へ寄附 |
| 金六拾錢 | 赤間關 | 婦人會 | 同 |
| 金五拾錢 | 東京 | 無名氏 | 同 |
| 金壹圓 | 山梨縣 | 分部盛之氏 | 同 |
| 金五拾錢 | 大坂 | 山岸りう子氏 | 同 |
| 金壹圓五拾錢 | 同 | 浪華女學校 | 同 |
| 金五圓 | 東京 | 後藤たか子氏 | 同 |
| 金壹圓廿錢 | 同 | 無名氏 | 同 |
| 金八錢 | 同 | 矢來町より | 同 |
| 金八錢 | 同 | 菜紙屑代 | 孤兒の友へ寄附 |
| 金二圓 | 同 | 川口龜吉氏 | 孤女學院へ寄附 |
| 金々拾錢 | 同 | 仝令閨氏 | 同 |
| 金貳拾錢 | 同 | 大富敬二郎氏 | 同 |
| 金壹圓 | 同 | 大塚眞城氏 | 同 |
| 金壹圓 | 同 | 星崎仙太郎氏 | 同 |
| 金貳圓 | 同 | 伊藤祐賢氏 | 同 |
| 金三拾錢 | 同 | 鈴木喜一郎氏 | 同 |
| 金拾圓 | 横濱 | 無名氏 | 同 |
| 金壹圓 | 佐土國 | 高橋ひさの氏 | 同 |
| 金四錢 | 東京 | 菜の紙屑代 | 孤兒の友へ寄附 |

孤女學院へ教育資金別口寄附

| | | | |
|---|---|---|---|
| 金壹圓八拾錢 | 東京 | 明治女學校 | 愛の睦 |
| 金拾錢 | 千葉縣 | 無名氏 | (十一月分) |
| 金拾錢 | 同 | 同 | (十二月分) |

合計金貳百六拾四圓五拾貳錢九厘

# 孤女學院報告

## 第十一月分寄附金

金壹圓　東京　婦人老人會
金壹圓卅錢　千葉　藤原金子取次
內
金廿錢　千葉　津島コウ子
金五錢　同　青木セキ子
金四十錢　同　無名氏
金十錢　同　馬龍夫人
金廿錢　同　瀨戸支一郎氏
金卅五錢　同　無名氏
金卅錢　東京三一神學校　岡久之丞氏
金壹圓六十二錢　同　チンゲ氏
金貳圓五十錢　東京　雛友、富貴、仝友、林正廣三氏
金六圓　甲州市河　無名氏(建築費)
金五十錢　無名氏
金五十錢　[illegible]　無名氏
金八圓　東京築地　三一教會外國婦人會
金貳圓　外國人某氏
金五十錢　大坂照暗女學校生徒有志(メンザンシ製造賣上代)
金十五錢　大坂　俣野氏
金廿錢　新海氏
金五圓　甲州　山梨英和女學校共愛會
金三圓五十錢　同　同校金子仙子
金五十錢　坂春江氏
金壹圓　無名婦人
金十圓　甲州　無名氏(會堂建築費)
金貳圓　小田切浦子
金壹圓　東京　ミス、ペーザ(寫眞代)
金廿錢　仝　明治女學校無名氏
金廿錢　仝　明治女學校無名氏
金十錢　上州　和田クニ子
金五圓　東京　チンゲ氏(會堂建築費)
金五圓十錢　仝　紅葉會
金壹圓六拾錢　仝　普連土教會有志
金拾錢　鈴木新藏氏
金拾錢　東京　三一神學校大谷氏
金拾錢　同　同　菊田氏
金六十錢　横須賀　渡邊氏
金八十錢　東京　明治女學校有志
金六十圓　米國　有志者(シス、ペーザの手を經)
金壹圓廿五錢　東京　宮原要吉氏(時計修繕收入)
金壹圓　山本安次郎氏
金廿錢　東京　第二醫院看護婦細野氏
金廿錢　無名氏
金十錢　長崎　大岡マス子
金拾錢　北海道　高橋又治氏

合計金百廿四圓八十二錢

## 十一月中支出

米代　金廿二圓八十五錢
肉八百屋物　金五圓四十二錢
税金　金六十三錢四厘
教育費　金八圓七錢六厘
器具代　金三圓廿九錢
履物代　金五十四錢
針代其他雜費　金拾三錢四厘
諸給料　金九圓
荷物發着運賃　金壹圓六十三錢
醫師車代　金四圓
藥舗拂　金壹圓五十五錢五厘
味噌醬油炭薪油代　金七圓八十八錢七厘
牛乳代　金八十三錢
子供寫眞代　金八十五錢
新聞代　金卅錢
郵税　金廿四錢
晒木綿代　金壹圓拾二錢

合計金六拾八圓三拾五錢六厘

## 十一月分決算表

十一月分寄附金高百廿四圓八十二錢
十月ヨリ越高金百貳圓卅四錢壹厘
總計金貳百廿七圓拾六錢壹厘
十一月分支出高金六拾八圓三拾五錢六厘
差引殘金百五拾八圓八拾錢五厘　十二月へ繰越

## 十二月中寄附物品

教育寶鑑一册　東京　伴君保氏
菓子一袋　仝　鍵原、中澤兩氏
菓子一袋　仝　立教女學校有志
菓子一袋　仝　中川氏
砂糖二貫目　横濱　無名氏
甲州純金製鎖一、金鎖二、眞珠八、糸織羽織一、膝カケ二、珊瑚珠鼈甲簪一、縮緬長襦袢一、卷繪櫛一、足袋二、トンボ玉鼈甲足簪一、繻珍丸帶一、鼈甲細足簪二本　甲州　無名二氏
基督一代記掛圖一　米國　ミセス、プリンクリー
菓子二袋、額壹面、旗一　東京　ミスゲッツ
綿入四、羽織三、帶二、小切二卷、古靴下十九、女用サルマタ四、シャツ二、腹卷十七、手袋二、茶一カン、玩具二、菓子一袋、前掛一、表地一、　仝　紅葉會
菓子一袋　仝　無名氏
人形九、玩具一箱　仝　チンゲ氏小供其他有志
洋綴帳簿九、函嶺講話一　仝　伴氏
菓子一袋　仝　武野武一郎氏
菓子三袋　仝　明治女學校無名氏
基督教雜書五十、菓子一　仝　中澤吟太郎氏
筒袖小供綿入二　横濱　フエーリス和英女學校有志
毛糸帽子一、シャツ三、襦袢三、ハラカケ三、股引三、足袋四、綿入三、筒袖九　横濱　無名氏
喜之音三册　東京　孤兒之友
毛糸五オンス、菓子二袋　仝　松波秋實氏
綿二包菓子二袋　仝　明治女學校無名氏
綿入一、袷一、足袋三　仝　坂崎マキ子
蜜柑五十七　府中　岡村氏

一 蜜柑一籠菓子二重　東京　小島清子
一 シャツ四、單衣二、切三、半襟一　仝　松山氏
一 信仰之友一冊　仝　信仰の友發行所
一 女學雜誌毎週　仝　女學雜誌社

東京北豐島郡瀧野川村
孤女學院

## ○北海孤兒院自八月至十一月報告

### ○收入　第一寄付品

一 女學雜誌毎號　東京　孤兒之友
一 慈善之晉毎號　札幌　北海禁酒會
一 護法之燈毎號　信州　竹原氏
一 鐵砲一挺　岩手　盛岡一姉
一 綿　箱館　齋藤壬生雄
一 讀本五冊、習字臨帖二册　網走　阿部政恒
一 教誨叢書毎號　片倉景光
一 眞綿　林蓬
一 日本禁酒雜誌毎號　横濱　西山丈平
一 農事圖解　同
一 天帝之示現　同
一 少年のため　同
一 救之門　同
一 殺業報告第六號
一 青年會月報　東京基督教徒青年會

### 第二寄付金

一 金壹圓　東京　雜賀アサ
一 金六拾錢　箱館　野口治
一 金二圓　仝　小川政英
一 金壹圓　名古屋　伊藤ヨシ
一 金壹圓　仝　前津日本教會
一 金壹圓　仝　村瀨美香
一 金五十錢　仝　中村牧陽
一 金壹圓　仝　有賀武雄
一 金二十錢　仝　仝ヤス
一 金十錢　仝　仝ミチ
一 金二十錢　仝　村瀨亮吉
一 金廿五錢　仝　小室重弘
一 金二圓六十壹錢　山梨　甲府婦人會有志者
一 金廿七圓十五錢　名古屋　ウヰンピシマ孃
一 金二圓二十壹錢壹厘　東京　孤兒喜會集會

一 金三十錢　東京　石川和助
一 金三十錢　仝　丹羽清次郎
一 金五十錢　仝　牧田清藏
一 金八錢　仝　天田儀八
一 金二十錢　横濱　野崎貞利
一 金十錢　仝　仝甲子郎
一 金十錢　仝　仝テイ
一 金二十錢　無名氏
一 金壹圓　東京　竹内房次郎
一 金壹圓　仝　井上文慈郎
一 金十錢　笠岡　猪木仁三郎
一 金二十錢　仝　石井濱一
一 金十錢　仝　坂野嘉一
一 金十錢　仝　廣井作五郎
一 金二十錢　仝　仝木熊宇太郎
一 金十錢　仝　菅野孝平
一 金十錢　仝　淺野ヤス
一 金四錢　仝　星田定七
一 金二錢　仝　桑濱喜吉
一 金五十四錢　仝　江木總平
一 金二圓　仙臺　松本儀三郎
一 金壹圓　紋鼈　日高吾
一 金壹圓　盛岡　杉木經吉
一 金參圓　紋鼈　中澤正
一 金壹圓　土佐　荒尾得壽
一 金壹圓　室蘭　日野愛慈

### 第三預兒月俸及賣上代金

一 金四十錢　靴下一足
一 金十圓　預兒月俸
一 金七圓三十壹錢二厘　小豆八俵
一 金十三圓七十六錢　鍋豆四俵
一 金六圓六十錢　鷄卵
一 金十二錢　豆殼
一 金壹圓五十錢　小豆八俵
一 金十五圓四十錢　鍋豆二俵
一 金三十圓二十錢

總計金百拾七圓拾三錢三厘

### ○支出

一 金百六十圓九十壹錢五厘　院舍建築費
一 金三十五圓六十五錢二厘　洞爺移轉準備中諸費
一 金五十九圓十壹錢五厘　食物
一 金四十三圓五十二錢二厘六毛　衣服及夜具
一 金九十圓六十五錢六厘　農具并諸道具
一 金二圓七十五錢五厘　藥料
一 金四圓八錢　切手ハガキ及電報
一 金十圓　耕馬壹頭
一 金六十九錢五厘　種物類
一 金壹圓九十七錢二厘　筆墨紙
一 金廿五圓廿二錢　旅費
一 金九十錢　書籍代
一 金六圓　家賃
一 金三圓三十四錢五厘　廣告料
一 金七圓七十二錢　靴下原料
一 金三圓拾九錢　薪炭油
一 金三十六圓廿三錢四厘　島年貢
一 金十三圓　仙台孤兒園移轉補助費
一 金二圓九十壹錢三厘　雜費

總計金五百七圓八十八錢四厘六毛
差引不足金三百九十圓七十五錢壹厘六毛
總員廿五名　準備金ヨリ支出

明治廿五年十二月
北海道虻田郡虻田村洞爺湖畔
北海孤兒院

### 正誤

客臘岡山孤兒院の窮迫を題して掲げたる一項は、編者が二三の口より傳に聞き得たる事柄を掲載したるなり、若し果して我紙上の報ずるが如く、岡山孤兒院に於て窮迫せば、何ぞ之を世上に訴ふるに寸刻たりとも躊躇すべけんや、然るに、客冬岡山孤兒院より、事實相違の旨申し越されぬ、吾人は斯る事項の事實相違にてありしよを、爰に喜こんで正誤す。

本日女學雜誌御送り被下難有拜見仕候弊院の究迫と題して天下の同情を求め被下候段御厚意の程感謝致候去年中々孤兒二晝夜斷食せしとありしは事實全く相違にして~~彼~~等をば飢へしめざる樣にこそ小弟等は主が最后に示し玉ひし如く裸躰十字架につき主の惠を待ちし次第に御座候間右は正誤被成下度奉願上候也

岡山孤兒院内石井十次
女學雜誌社御中

## 女學雜誌大取次所

| | |
|---|---|
| 東京市錦町二丁目 | 武藏屋藤藏 |
| 同　尾張町二丁目 | 東海堂 |
| 同　彌左衛門町 | 嚴々堂 |
| 同　表神保町 | 東京堂 |
| 同　出雲町 | 警醒社 |
| 同　鐵砲町 | 指金堂 |
| 同　元富士町 | 盛春堂 |
| 福岡縣福岡 | 積善館支店 |
| 神奈川縣橫濱市 | 共同新聞發賣會社 |
| 神奈川縣橫濱市 | 万字堂 |
| 京都佛光寺烏丸 | 東枝律書店 |
| 同　新町竹屋町 | 便利堂 |
| 大坂本町四丁目 | 岡島支店 |
| 同 | 福音社 |
| 神戶元町四丁目 | 福音社 |
| 函館市 | 福音社 |
| 熊本縣熊本 | 草野門平 |
| 京都新町二條 | 大黑屋書店 |

## 女學雜誌市內賣捌店

| | |
|---|---|
| 麴町區上六番町 | 日盛堂 |
| 同　同 | 福音舍 |
| 同　飯田町 | 三文字屋 |
| 同　同 | 洗心堂 |
| 神田區神保町 | 松江堂 |
| 同　同 | 靑柳堂 |
| 同　雉子町 | 大塚書店 |
| 牛込區神樂町 | 積善堂 |
| 同　同 | 正導舍 |
| 同　着町 | 深田彌兵衛 |
| 本鄕區眞砂町 | 文壽堂 |
| 同　同 | 就本堂 |
| 同　富士前町 | 解明堂 |
| 同　同 | 盛春堂 |
| 牛込區岩戶町 | 松英堂 |
| 下谷區東黑門町 | 三一堂 |
| 神田區松岡町 | 山口次郎 |
| 同　旅籠町一丁目 | 樋本 |
| 同　鍋町 | 清水嘉兵衛 |
| 日本橋區本町三丁目 | 庭花屋 |
| 芝區南佐久間町 | 鈴木新兵衛 |
| 同　櫻田本鄕町 | 栗原 |
| 同　同 | 鈴木 |
| 赤坂區新町 | 赤川市兵衛 |
| 同　同 | 飯田 |
| 京橋區出雲町 | 金盛堂 |
| 同 | 山田堂 |
| 本鄕區天神町 | 攺進堂 |
| 神田區小川町 | 大塚雜誌店 |
| 同　錦町二丁目 | 眞故堂 |

其他書籍繪双紙店に於て賣捌く



一雜誌及び書籍代金二十錢未滿は郵劵代用不苦候、郵劵は五厘切手一割增の事

一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃さも濟にして御送付相成度候

## 女學雜誌代價

○白赤双方合せ購讀の分

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 十冊 | 前金 | 五十八錢 | 府外 | 六拾三錢 |
| 廿六冊（半年） | 同 | 一圓四十三錢 | 同 | 一圓五十六錢 |
| 五十二冊（一年） | 同 | 二圓六十錢 | 同 | 二圓八十六錢 |

○白赤の内一方購讀の分

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 六冊 | 前金 | 三十五錢 | 府外 | 三十八錢 |
| 十三冊（半年） | 同 | 七十三錢 | 同 | 七十八錢 |
| 廿六冊（一年） | 同 | 一圓三十錢 | 同 | 一圓四十三錢 |
| 一冊 | 金六錢 | 郵稅 | 金五厘 | |

## 廣告料及無料廣告

| | | |
|---|---|---|
| 一行（廿七字詰） | 一回 | 前金拾錢 |
| 同 | 三回以上 | 一割引 |
| 同 | 六回以上 | 二割引 |

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道德なる廣告は謝絕す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲くるものにて一切無料さす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部注文を要し以上半頁每に十部增さ定む。

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

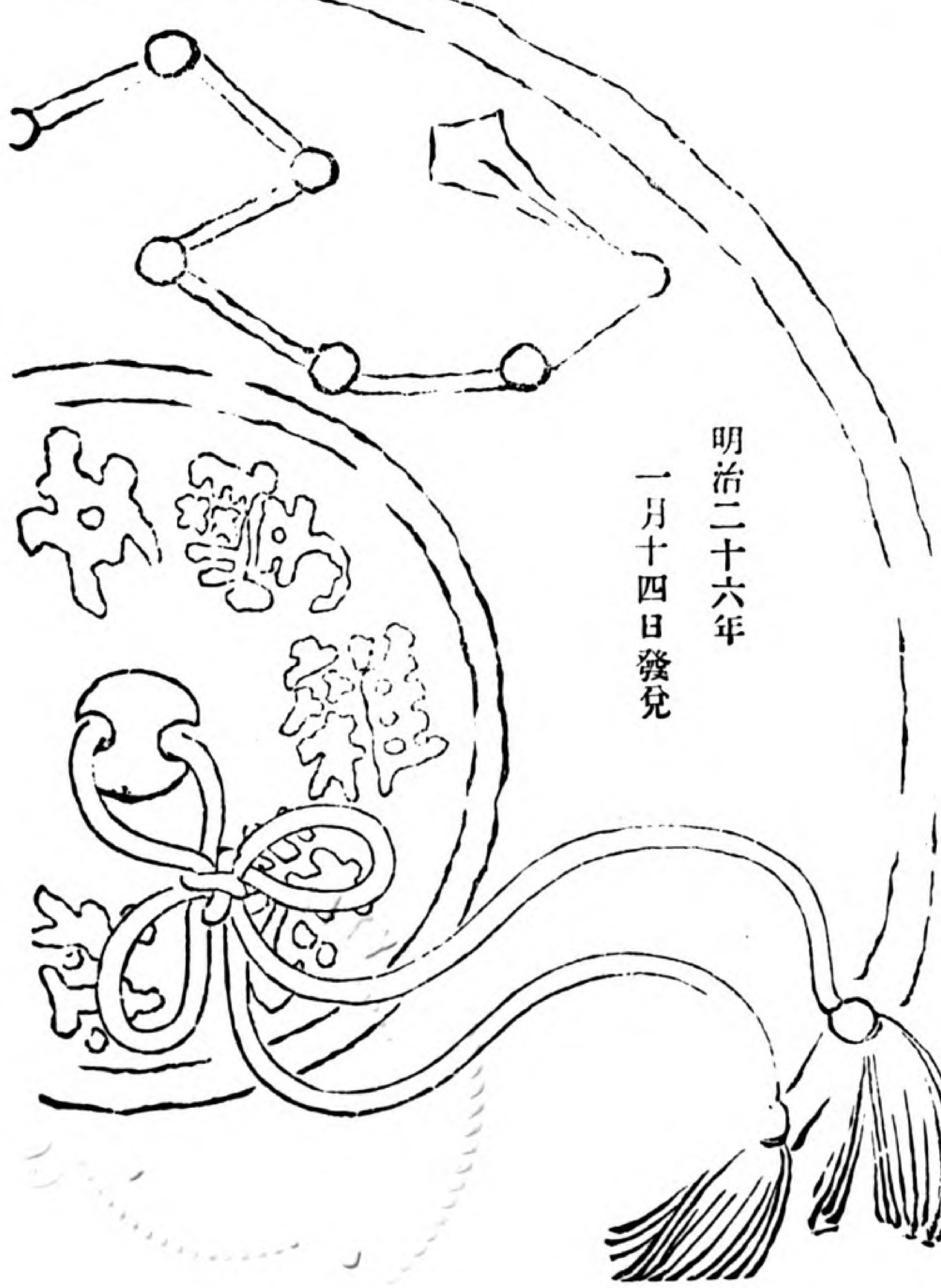
編輯兼發行人　嚴本善治

印刷人　堀口庄三

# 女學雜誌

第三百三拾六號

甲の巻



明治二十六年一月十四日發兌

注意

- ●社説 新年經綸。決意奮起せよ。地方自治文部省
- ●史傳 日本の思想界に於ける情(上)（櫻月子）
- ●論説 豪商(上)商人氣風の履歴（大知子）
- ●批評 「罪と罰」の殺人罪。尾花集（透谷子）
- ●小説 ローレンス(第一回)（若松しづ子）　富貴。(訛住)、●(墓參り)（機の屋綾織）
- ●雜録 青年と英雄傳記（畜勘子）　山本覺馬氏の逝去（淡海子）
- ●片々
- ●附錄 ウヰルヘルム、テル（紫苑山人）

# The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 336. JANUARY 14th. 1893.


EDITORIAL:—Planning for the New Year.

BIOGRAPHY:—

LEADING ARTICLES:—The National Sentiment. The Mercantile World.

CRITICAL NOTES:—"Sin and Punishment." "Obanashū."

NOVEL:—"Laurence. (A Translation.) "Wabi-zumai.

MISCELLANEOUS:—Live of Noble Men for the Young Men

Death of Mr. Yamamoto Kakuma.

FRAGMENTS:—

## 本號（第三百三拾六號）目次



## 前週（第三百卅五號）赤表



## 前々週（第三百卅五號）白表

女學雜誌社

# 文學界

第壹號

一月廿日發兌

## 目次



此他毎號に附録を添えて文學上有益なる高想道味の古人が詩文を集めて書籍と爲さん目的なり、先づ第一號には

兼好法師の家集……六ページだけ　阿佛尼乳母の文……一二ページだけ

又古書と新著の有益なる書名とし解題とを常に讀者に紹介するの勞を執り、又和漢洋の詩歌文章を追々講義して專ら稗益あらんとを勉む、


定價表

| 前金 | 市内 | 府外 郵税共 |
| --- | --- | --- |
| 一冊 | 六錢 | 六錢五厘 |
| 六冊（半年） | 三十三錢 | 三十六錢 |
| 十二冊（一年） | 六十錢 | 六十六錢 |

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

## 恭賀新年　巖本善治

年暮より一月下旬迄高知縣下漫遊致居候に付參趨賀正の禮を欠き乍略儀以紙上恭賀致候

## ○赤表新年附錄

第三百三十五號乙の卷
一月七日發兌す

貞婦於石　櫻井成明
おふな　若松賤子

## 恭賀新年　社員一同

赤表の新年附錄「貞婦於石」は讀者にして、其貞節、其孝養に感ぜざるもの殆どなし、寔に世の婦人が龜鑑たるに足るべし、殊に著者が深く心をこめて、之を世に紹介せられたれば今般我社に於て之を一小冊子となして極廉價にて徧く世にすゝめんとす。

## 貞婦於石の傳

定價　金壹錢
郵稅　金貳錢

## 迎年多福の健康を祝す

日本橋區四丁目十一番地宅
**星野愼之輔**

年賀脱漏の諸君に乍略儀誌上にて祝福申上候

---

○豫告　近刊

櫻井明石重君譯

## 希臘孝子 腓立比物語

今を距ると六十年希臘國の勇士等、土耳其國の壓制に堪へず義兵を擧げたりし時、一方の將となりたる、メサロスなるもの戰敗れて、其妻と共に奴隷に賣られて、遠くアラビヤのバグダッドへ連れ行れて、苦役に服しをり、其子腓立比其時六才なりしが、或人に養育せられて十七才に至りたる時、土國より遣はされたる管領の危難を救ひしが縁となり、管領腓立比の至孝勇猛に感じて莫大の金を與へ、船を用意させて兩親を贖ひに出しやり、船中にて腓立比は船長の危難を二度助け、又船長の助言により腓立比基督信徒の身を以て、土國人マホメット宗徒の假裝を爲して、單身にて隊商の群に加はり愈アラビヤの沙漠に乘り込み、沙漠中にて其基督教徒なると露見し殆ど生命も危かりしを、隊商の頭領其至孝と堅信とに感じて、大に腓立比を眷みるに至り、後又隊商等がアラビヤのベドウイン族に剽掠せられ囚虜となりし時、腓立比も亦囚人となり、爾後幾多の艱難變遷ありて、終に酋長腓立比の志に感じアラビヤの健兒に護送させてバグダッドへゆるし遣り、バグダッドにて非常の困難に遇ひ大失望したりしも、圖らぬ助けを得て遂に兩親を奴隷苦役の中より十二年目に芽出度救ひ出しぬ。

右は譯者が三年の辛苦を經てものせし、悲むべく喜ぶべく驚くべく惛むべき境遇の變化、淚なくして讀みをへられず。譯者或人に與ふるの書に「實に小弟初めより此種の文學にならはず殆んど產の劬勞をいたし、或は車上に巢林の戲曲を繙きて、兩眼のいたくかすむをも顧みず、枕邊に曲亭の集を備へ指頭の寒に感覺なきに至り云々請ふ不日刊の成るを俟玉へ。

女學雜誌 第三百卅六號 明治二十六年一月十四日發兌

# 社説

## 新年經綸

舊年を送りて新年を迎ふれば、茲に意自づから新たなり。肅然として形容を更え、今更の如く感悟する所ろの大問題あるなり。

逝く年の遺念大率ね意に滿ちず、一歳の畫策十に八九は畫餅に屬したりと云へど、奇しき哉、之あるが爲めに新年に對するの處望中々に厚く、雜多の計策胸裏に出現して潮の湧くに左も似たり。然れども、嚴然として此所念を沈壓せり。斯くて靜かに吾が心に問ひけらく、汝ぢ其一歳の爲めに計畫するに先だち、其終生の爲めに計畫する所既に定れりや何如に。汝が一年間の經綸熟するの前に於て、其の全生涯の爲に量度する所、既に極まれりや如何にと。吾心よ、汝は先づ此書の大問題を決せずんばある可らず。抑そも、汝が全生涯は、將に如何の景情にてあらんとする乎。試みに問はん、汝は到底其理想に達するヿ能はざる乎。若し果して達す可らずとせば、日々夜々の修德なるものゝ結局それ何の効かある、百步にして五十步に誇るも亦それ何の甲斐やある。苟くも理想に達す可らずとせば、今日の練磨は要するに絕望に歸すべきもの耳。

又試ろみに問はん、汝が終生の目的は抑そも何事ぞ。不幸にして、此の最後結局の大目的、確定するヿあらずんば、一歳二歳に對するの計策は、果して何事の爲めに煩悶するの愚ぞ。目當なき航海は、流るゝに均し、的なき發射は空を擊つが如し、心ある者にして、此の愚かを久しふするヿを得んや。然れども、終生の大目的未だ分明せず、人類の歸趣未だ判然せずして、而して只だ目前の爲めに狂奔し、之を以て有志家の運動なりとするヿあり。あゝ淺ましき哉、心よ。

爾ぢ理性ありと云ふ、蓋し眞に之あり、左れば、爾は如何なれば、其理性によりて究極に至るまで考測せざる。たとひ事物の究極に達するヿ能はずとするも、何をもて其達し得べきの極度に至る迄で推究せざる。あゝ、心、爾は此の限ある人

世を限なきものゝ如く思惟せり。到底哀別苦離すべきを、忘れて長久に其愛人と住ふものゝ如く誤認せり。財寶の力万能にあらざるに、之を唯一のものゝ如く妄りに尊とめり。泡沫を眞珠とし、夢幻を樂園とし、死すべき世を永世とし、果敢なき實相を假りに頼母しきものゝ如くせり。あゝ、汝が理性あるものゝ爲に晷れり、濁れり、何んぞ一と度び洗清せざるや。

汝、時として、安心の地を覓むと云へり、汝甞て宗教の談話を聽聞し、神ありや無きや、來世ありや無きやと問へり、而して多少の研究する所ろありたりき。然れども、汝が問は、宗教的の問にあらずして、空理的の問なり。問すでに答へられ、理既に辯ぜらるゝと雖ども、心眞に釋然として會得すると能はず。會得すると能はざるも、而も煩悶する所ろ薄く、人世一大事の問題未だ決せざるに、倘ほ平々然として日常の事を思ひ念ふ。

淺ましき哉、吾心よ。爾もし斯くの如くにして在らば、爾は未だ人世の歸趣を辨知せず、未だ終生の目的を領解せず、泛々として人間當然の道の外に浮み、たゞ勢の爲めに流されて一年、二年と送る。何んぞ其の淺ましきや。あゝ心、何んぞ其の卑しきや。

反覆靜思して、我心に自問自究す。而して、一世の目的既に確立し、全生涯の歸趣既に分明し、悠々たる永遠の將來、すでに其極まる所ろを示すが如し。吾、此の大悟覺の上より計算して一年を經綸すれば、一年に對する吾念ひの、敢て局促せざるとを感ず。

夫れ、人は万里の道を行くもの也。其道、現世と未來とに渡る。然るに啻に一里の爲に經綸し、此に執着玩迷して、遠きを念とせざる時は、恨み之より大なるはなし。誰か百里の龍を尺寸の池に押込め、宇宙六合の大天地を重箱の內に納むるとをせん。然るに、天地と共に長生し、宇宙と共に同存するの人を擧て、一歳の限りある小經綸の內に投入嚴制せんとするものは何人ぞ。

年新たにして所感亦新たなり、則はち、吾心を取出で、之を點撿査察し、其安んずる所ろ、立つ所ろの果して依然堅固なりや否やを見分せり。希はくは、吾心を擧げて、謝物泥土の班に入らしめむ。決意斷然、安心確固、陽光熙々。則はち、感謝

して新年を迎へ、分に應ずるの祝賀を了す。

## 決意奮發せよ

我國今日の形勢たる、四面に荒野漠々たるが如し、何處に行くとして開拓の地なき所やある、所在に金礦連々たるが如し、何處に行くとして採掘の寶なき所やある。此地實に志士大ひに爲す可きの地。此時實に大ひに奮ふ可きの秋なり。

學術界の爲に之を言はば、日本の博物學は、未だ歐米の學士が着眼せざる所ろのもの多し。異草、奇木、珍石、怪獸の大ひに研究す可きもの少なからず。日本の社會學も亦た大ひに講習すべき價値あり、政治、法律、及び歷史の學も亦然り。二千五百年間皇統の連綿たる、國民の一統せる、種々の外化を巧みに應用したる、其跡皆な斯學の好材料たり。鐵道一走し、風習忽變し、外風更に吹渡るの前に於て、今や實に研究せざる可らざるの時也。他のもろ〱の學科に就て之を云ふに、皆一々此の如し。

殖産上に於ては、我國の四面の海、我國到る處の山、茫々たる奧羽及び北海道の野、皆な之より大ひに着手擧利すべきの地なり。同胞何んぞ戰々として徒らに苦慮するや。船を蹴つて走らせ、鋤を取つて起たば、我國の山川海野宛然無盡藏の寶庫を開かんとす。

商業界の爲に言はば、支那、濠洲、及び北米、三方に於て吾に對し、吾と大ひに交易せんとを求め、歐洲の商船皆な我國に寄港して東洋の貿易を爲さんと欲す。同胞の準備分に充ちたる曉には、八方の沿海皆な貿易するとを得べし、我國商業界の前途尤とも多望也。

政治界の爲に言はば、立憲政の新躰未だ熟せず、地方自治の基礎未だ固まらず、人心依然舊の如くにして、而して政躰今や大ひに改めざる可らず、之れ志士尤とも力を盡すべきの秋なり。

宗教、及び、道徳の事に付て之を言ふに、我國固有の特所を發揮して、以て万國に示す可きものあり、思ふに東洋の道義を顯昭するの任、我日本の上に掛る耳ならず、翻つて万國の靈性界に一大感應を與ふるの天賦、亦我この故國の上にありて思はるゝものあり。

左考右慮すれば、此地、此秋には、實に多望爽快のものあり、重

任大用の事あり。是れ實に志士をして蹶起せしむべきものとす。

## 地方自治

地方に遊ぶものは切に感ず。今の有志者、何すれぞ斯く主府にのみ狂奔して、四方の郷村の事を顧みざるその太甚しきやと。

鷄口となるは、牛後となるに優り、伴食宰相とあるは、眞二千石たるに若かず。主府に寄留して、月給に在つき、年々根底なき浮薄の事業に月日を過して、單に虚名の徒らに揚るとを頼みとするは何事ぞ。

寧ろ如かんや、一地方、一郷村に歸りて、之を十分に誘導監理し、之が團結を計り、之が成長を助け、以て地方自治の眞境を形成して、文明的の一藩を建立せんには。

此の故に舊藩主歸郷の説は、吾黨が夙に同意する所なりと雖ども、更に彼の郷士、家老、庄屋、名家等の子の主府に遊學するものに告ぐ。諸君學成らば、寧ろ歸郷すべし、郷に於ての事業は、啻に其成し易きのみならず、更に面白かる可し、更に堅固なるべし、而して日本全躰の爲に更に眞正の益多かるべしと。

## 文部省

今の如き文部省は當に廢す可き也。然れども、立國爲政の上に於て、もし眞とに其事を爲し得可しとせば、文部大臣となる亦愉快の職分なる哉。

現在の大臣中、實に文部大臣の職分を辨知し、其大使命を眞とに實行するもの殆んど有るとなし。故の森有禮君、其の資格の一二を備えたりと雖ども、惜ひ哉、學淺く理想高からず、而も享年短くして、遂に輿望に應ずると能はざりき。

文部省廢す可らざるか、眞に其大臣たるもの何處にありや。

日本豈に一人のギゾーあらずとせんや。

小學校の教師たゞ文部省を有がたがり、文部大臣を崇拜し、其の鼻息によりて、教授の聲音を變ず。彼等が何如なる文部大臣に歸依するやを思ふて、憫れみに堪へず。遂に理想文部大臣の爲に一言す。

# 史傳

## 日本の思想界に於ける情（上）

棲月子

佛蘭西のテインなりしか、英國の人を評して彼等には哲學者なしと云ひき、實にやホッブス、ロックの古へよりミル、スペンサルの今日に至るまで、所謂純粹のメタフィヂシアンと云ふべきもの甚だ稀なり、之れテインの英人を以て意志の人なりと斷ぜし如く、其の精神の眞に實行的なるに在り。一個人に個々の相違あるが如く、一國民も亦個々特殊の性質を有つ、嘗て英佛獨の人を評するものありと言ふ、某の獸とは如何なる者なりやと問はゞ、英人は銃を肩にし行て之を捕へ來りて說明す、佛人は動物園に之を求む、獨逸人に至りては圖書館に入り書籍に依りて之が說明を求むと、之れぞ三國の特質を示すものならずや、若し心的官能の語を貸りて言はゞ、英は意志なり、佛は情なり、而して獨は智ならんか。

吾が國上下二千五百餘年、此の皇統連綿の國、此の國、此の國民を一貫する思想はなきや。人は言ふ吾が國は摸倣の國なりと果して然りや、然りとするもわれはわが國民の愛すべき處其點にありと言はん。芙蓉の峰の富士如何に美しきかな、白扇倒懸東海天、此の峰此れ何者ぞ、白砂青松の夕日に映る須磨明石麗しからずや、此の濱此れ何者ぞ、未だ見ずと雖もわが國の三景、橋立、松島、嚴島、此れ皆わが國の自然を代表するものに非ずや、朝日に匂ふ山櫻、雪に香はしき梅の花何れか美ならぬものやある、此の自然此の花は是れわが國の思想ならずや、此の優麗なる此の閑雅なる思想とは即ち情なり、思ふに情は吾が國民の思想を一貫して今日に至りしものには非ずや。

情は能く此の國民を活動せり、然れども既に情なれば女性的たるを免れざりき、神代の史を繙くに優麗なる思想は來るも未だ崇高の念は出でず、開闢の初代には天照大神あり、此の神は是れ日本史の起點にして既に女性なり、吾が國の皇統連綿を誇るは何んぞや、わが國民が皇室に對するの感情は到底他國に見るべからざるもの、之れ實に國民思想の奧底に感情

の基礎あるが爲なり、元の兵一旦來るや國民の精神は悉く之に向ひたりき、維新の革命の如きも彼の宗教信仰の上に基礎を置きし英國十七世紀の革命と其の起點に於て大ひに相違する處あるなり、儒教は此の國に來れり、佛教も此の國に來れり、彼等は如何なる働をなしたりしや、儒教は情の地に植へられて益々生長せり、佛教も情の地に置かれ時に或は情を滅却して全く意志の人を造りたるかの如き顯象のなきに非ずと雖も又此の本性の情を動かす能はざりき。左らば吾が國には大哲學者を出さゞりき、大事業家を出さゞりき、只此の情の人種の產出したりし尤も愛すべきものはわが文學是れなり、わが國若し他國に誇らんと欲せば、此の美術、此の文學を誇るべし、われは此の情を愛す、われは其の顯象なる文學を愛す、意志や智識や養ふて爲すべし、只養ひ難きもの、一朝にして爲得ざるものは情なり、われは眞實なる情の上に立ちし思想を望む、此の情は史上の人物にも能く顯れたれども、今は文學の上に顯れ來りしものを觀察するを得ん。

和歌は尤も好く吾が國民の思想を顯はせしものなり、奈良の朝に大成し今日に至るまで一盛一衰遂に絕へざりき、今其の題目を見よ、歌ひ出でたる跡を見よ、必ずや此の國の自然は其の詩想たりしなり、奈良朝の歌勇健なりしなるべし、然れども、田子の浦に富士を見、明石の濱に舟を眺むるに非れは誠に可憐なる戀なりき。思ふに吾が國上古にありし此の戀は淳朴、甚だ愛すべきものあるが如し上は 神武帝が皇后を迎へ給ひしより歷朝明滅として、貴顯の內に直截なる修飾なき戀のありし跡あり、われは惜む、此の戀をして基督教の洗禮を受けしめなは如何なるものなりしか、今日泰西の戀に勝る万々なるものありしならんに、不幸にして此の戀は佛教と儒教との洗禮を受けたり、彼れ終に人間思想の一部に禁足されけり、然らは終に平安朝以後に於て淫奔壞亂の顯象を出し、遠く德川氏の時代に至るまで綿々絕へす彼の輕文字として顯れたるに非ずや。わが國有數の歌仙、貫之が和歌に對する思想は以て此の國民の思想か情に勝りて意志と智識とに乏しきを見るに足らん、彼れが古今集に序する辭、人の能く知る處なり、彼れ言ふ「力をも入れずして天地を動かし、目に見へぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武夫の心を慰むるは歌なり」と是なり、彼れが言ふ處一として優

ならぬはなし、たとへ其の擧ぐる處は和歌の力を顯せしものなりとするも、彼れの詩眼に映ぜし處此の優なるものなりしなれば足れり、彼れ又曰ふ「富士の煙によそへて人を戀ひ、松虫の音に友を思ひ、高砂住の江の松もあひ生ひのやうに覺へ云々」と、自然と戀と詩想との連關は、以て之が基礎に於て日本精神の女性的情の在るを見ん。

儒教と佛教とは早くより吾か國に入れり、奈良平安の朝に於て彼等は文學に影響ありしには相違なし、然れども未だ眞實日本の思想と同化して文學に變動を與へたりとは思はれず、當時の詩歌の内に儒佛の思想を歌ひたるものなきにはあらずと雖も、誠實に直覺して然か感ぜしや否や、われは然らずと思ふ、此は故人にも然く考へたるものありき。然れども儒教の如きは、わが國の精神と異る處少く、衝突する處少かりしは明けし、日本の國民は敎へられずして忠孝の道を辨へたり儒教は此の思想に立ちしものなれば、些少の困難もなく歡迎せられぬ、後世德川氏時代の儒教は大ひに異れる處あれは、別に研究を要すべし。日本文學に他界に對する思想の著作として透谷子が擧げし、平安朝の竹取と謠曲時代の羽衣とは、わが思想界の異例なるべけんも、兩者共に優麗なる女性にして、到底日本の產物たるを免れず、殊に竹取の如き、佛書より來りしも、彼れに於ての主人公は男性なりと、わが國の思想となりては女性となりしか、又以て此の國民の特質を察し得ん。要するに奈良の朝より平安朝に渡りし思想は其の固有なるものを失はざりき、殊に平安朝詩眼の代表とも言ふべき源氏物語は婦人の手に成り、當時の樣を寫したりと言へは、益々其の思想の如何を察し得べけん。

社會の上流にのみ行はれたる文學は、漸く鎌倉時代に至りて普通人民に紹介さるゝの傾向をなせり、世は武門の手に歸しぬ、日本の政躰は一變せり、武道は起れは、此の時に於て當代の志を得ざるもの少なからざりき、漸く厭世家を多くせり彼等は榮譽と人爵とを捨てゝ平民となり、或は山中に隱れ、或は四方に行脚せり、長明の如き西行の如き當代を表するもの、彼等は後の伏線となり文學は次第に平民に渡り、連歌の紹介を得て宗祇を出し、終に俳諧に達したりき。佛教は此の上下顚倒の時代に至り厭世家の紹介として能く日本の思想に同化されたり、北條氏の世に至りては禪敎大ひに流行し、武

と相並びて、わが思想界の特産となりぬ、此の兩者は情に非すして意志の領内に來るものなり、世には漫に禪を以て無爲となすものあり、知らず無爲は有爲の大本とはならざるか、何故にルーテルの事業は禱りに依りてなりしか、此は今論ずべきの題目に非ず、斯く意志の力は顯れたるもわが思想界は猶情の領地なりき、意思の力は情の上に植へられたりき、鴫立澤に無常の哀れを感じたる西行、行川の流に悟道を遂げたる長明、何れか情の人ならずやは、此の時代の著作なりと云ふ平家物語の如き、源平の盛衰を敍しながら、哀れと無常とは全編の骨子にして、祇園精舍の鐘の聲を以て始より、灌頂の卷に終る、之れぞ當代の情を示す摸範とも云ふべき、文覺の如き扱く可からざる意思を有せしものさへ、其の行跡を尋ぬれば亦情の礎の上に立てりし者なり。

# 論説

## 豪商界（上）

天知子

### 商人氣風の履歴

金錢は巨大の魔物なり、之れを扱ふに禮なくこれを用ゆるに法を失せば、其人を惡化し其心を俗殺す、然れども其人を得其法を得れば、人を益導し事業を神聖にす、金錢固より富の一部分に過ぎずして、社會の富を交換する權利の物品たるのみ、而して此便利の二字は万民衣食住の係る所と成りて、社會在住の習慣性は一種の威權を其上に尊敬せしむるに至りぬ、此威權は聖となく俗となく、人間生活の必要より自ら注意を延く所と成りて、普通俗界の人心を左右する魔力を生じ人間の弱點を掌握するに至りぬ、此に於て金錢と敎育との關係をして吾人に疎そかならしめざるの感を促がし、金錢は即ち道德なりと傳道するに必要を感ずるに至れり。

最も金錢を多く扱ふて朝に夕に其感化を強く受けたるものは商人界に若くものなし、而して最も早く人に接し最も早く世に摩擦せられて輕率に淺く人世を速了し、人道を考へず學の意味すら誤認して德を案ぜず、終に大に金錢の惡化敎育を受けて愍然の觀を呈せし者亦此商人界に若くものなし、余は先づ此惡意なき無罪の小兒（人間の本領より言へば）が知らざるの故を以て今日の風潮を致したる履歷を觀察し、次で經濟の奥秘を一言して警むる所あらんとす、余は實に商人の身方として筆を執る者なり。

日本は豐富の國なり肥沃稀れなるの邦土なり、故に能く一鄕の需要は一鄕の供給にて支辨し、一州の富は一州の中を循還して欠乏する所あらず、之れ日本が水草を逐ふて轉居するの氣風を養成せずして自ら鎖國攘夷の腦髓を養ふたる遠因なり而して又一方には滿足の生活を受けて君子國たるの氣風を涵養したる遠因なりとす、東洋の一隅に於て永年交通を絶ちて默々坐禪の生涯を送りたるもの、蓋し供給需要の滿足を以て一原因と爲さゞるを得ず。貿易とは此供給需要の活動する現象にあらずや、供給需要にして已に緩慢ならば社會に分業の必要盛んならず、分業盛んならずんば貿易大に起るべからず、貿易已に社會に喝釆せられず、加ふるに封建制度戰國の遺風として互ひに相覘ひ相疑ひて、他國人の來るを悅びず可成交通を絶たんとす、此に於て貿易愈々冷遇せられて現今の如く社會に重きを占むるを得ず。商人は夫れ貿易の媒介者たり、故に貿易と共に社會に歡待せられざりし也、是れ德川の太平時代に於て人民四階級の最下級に位して士農工商と歌れたる所以ならずや、人間は元賓價値にて論ぜず單に市塲時價にて論ずる宗族制度の偏癖より、商人は或一種の冷嘲を含める町人の稱號を以て呼ばれたりぬ、是れ商人が當時の主義と其時代の氣運とより得たるものにて、蓋し甘んじて受けたるの傾きありしなり。商人が當時の主義とは何ぞ、其時代の氣運とは何ぞ乞ふ之れを一辨せん。

戰國の武力氣風に養成せられて右に劍を握り左に法政を握りたる、上流民種の士族は常に一命を賭するの覺悟より貯蓄心を放擲し、廉潔なるシヴアーリーを敎育するの必要より金錢を餘り多く疎んぜしめ、其衣食足りて禮節起る的の養育に最も巨策なる世襲恩祿は餘り多く經濟思想を遣忘せしめぬ、當

時社會全部の働き場を悉く士族に占領せられたる商人は、非常の熱心を以て其放擲せる金錢の領分を專領するに至りき、而して供給の生産權を握りたる士族は又彼れが需要者として第一の大花主にてありし、此經濟未熟の大花主が威張るを以て一種の快樂とせるもの、實に彼れ商人が奇貨として術數を施し同時に又自己が一大弊風を釀したる所なりとす。彼れが得意の平身低頭は敬禮に非ず畏懼に非ず、彼れが甘言巧舌は歡迎に非ず尊親に非ず、唯其一種の快樂癖に乘じて其遲鈍なる經濟眼を茶にしたるの一手段たりしのみ、馬鹿にされて馬鹿にせよとは、損をして得を取れとの經濟語と共に、一般彼れの腦髓に染浸したるの秘訣なりし、腰の高きと紋付き黒羽織とは商人の大禁物なりしが如く、跼蹐たる態度と不景氣を口實にするは商人の心得たりしが如く、總て內に包みて隱すの精神を一種の道德と爲したりしなり、蓋し專政制度の配下に慣れて沒收と用金との恐るべき命令を避んとせしに由る。斯くして此主義は因習の久しき、終に世々の子孫を經て全く其心性をも薰化し、氣風自から卑賤に流れて金錢に低頭し、金錢に畏懼して氣節を賣るものあるに至り、人は皆修學と修道とに理想を置かず、心性を硏磨して人物を鍛錬することを願はず、自ら甘んじて一種輕蔑の意味ある町人の名稱を認可し心も全く町人と化し去りて而かも馬鹿にせられて馬鹿に爲したる者、終に又馬鹿にせらるゝに至れり。而して當時又士族社會に失敗零落せし者、來り潛みて商人と成る者頗々多きを以て、劍を捨てゝ算を執るは利の民に俗化して氣節を失ふものとし、商人界は士族の眼には敗德墮落の世界と認定したりしなり、之れ其時代の氣運が當時の商人主義の弊を助けて、素町人の冷罵を招きたる所にてありき。

然れども此等の刺戟は能く忍耐と謙儉とを養ふて一種の道德を鍛錬するを得たりぬ、此道德はベーコンが所謂金錢は道德なりといふに適合して質實謹直なる善良氣風を興起するに至り、甚だ見るべきもの多きを爲して將さに一大進步を爲すべきの氣運に遭遇せり、然るに明治の一大革命が社會の秩序を大崩するに際し、俄然として商人界に大波瀾を起し、老舗巨屋破滅して山中赤手の浪人一夜に巨商と成る、此に於て新舊全く相反する二派の商人を現出するに至れり。

凡そ事業の成功に費す時間は、事業家の心性と技術とを其事

業的の人と成らしめて、人と事業とを消化するに必要なり、故に事業を小より成上げて大となさしむるの幾多營々の辛苦は、其事業者の道德氣風を涵養するに缺く可らざる事なりとす、然るに浦賀の一砲聲が俄然として貿易の黑幕を破るや、財なく資なく名なく履歴なく而して又家累なく、獨り腕を撫して奇貨を握らんとせる一種多血のチユートン人種は、横濱開港の激流に一身を投入し、以て投機の浮沈を一時に決したりぬ、當時日本全土の經濟界は其政治界と共に、開港の一問題に頭腦を傾け、横濱一市は實に日本の投機所たりしなり。此多血のチユートン人種は長袖遊惰の羅馬府民を一襲して國土を掌握したるの腕前を以て政治界に薩長土の天下を僥倖したると同時に、彼れは商業界を僥倖して一大勝旗を建るに至れり、慷慨剛直の士が悲憤の愛國詩を吟じて天下の腥風に和し、血刀を提げて一命を多難に趣かしむるの時、彼れは鼻歌うたふて孤身飄々、草鞋を異途の旅行に向けて、彼れは市街に土を擔げり、彼れは竈前に飯を炊げり、彼れは商家の僮僕と成れり、斯くして彼れは時勢の激流に乗じて大江に吐出され、終に所謂紳商なる一民種を搆成するに至りたり。彼れが進取的の鋭鋒は保守的舊商人派をして後へに瞠若たらしめ、商人名簿の上位を占めて燦然たる金光を社會に放てり、然れども平親王將門の新大裏は到底沐猴の冠たらざるを得ず、彼れが産を成したる當初の僥倖的一攫千金思想は、深く腦髓に浸染して營々の辛苦より蓄積したるの修養なく、謙儉道德は地を拂ふて心自から放逸に流れ、俄かなる地位の劇變は其人をして其富と相添はず、腦中反省するの書物なく滿身薫育されたる嚴正の道德なく而して金錢を獲るは人間唯一の目的なりと飽まで固信せる彼れ人物に於て、自ら自己が金儲けの巨腕を賞揚して終に驕謾傲奢の心を養ふは固より無理なるとに非ず、衣食を衒ふて富を傲り驕奢を擧動ふて得意たる如き幼な心は、彼れが一世の快樂として無理なるとには非ざるなり、唯其酒に耽り妾に戯むれて子弟を誤らしめ、吏に媚び利に虐たげ恬然として恥づるなく、而かも公民の假面を有ちて社會を毒するに至りては、吾人豈痛責せざらんとするも得んや、アヽ彼れは時勢に產出されて金錢に毒化せられたりといふ可し。而して社會は盲目なり、彼れが表面的誇張の燦々たる金錢に眩惑して、内實せざる外浮の財産のみを信じて人物信

用なる秘訣の信用を思はず、嘖々と歡迎して往々信用の膨脹を生じ商業上恐慌を來すもの少なからず。內に隱れ藏して最も用心深く、謙退質實にして固風の店法を墨守し、寧ろ因循の譏りを諾受して綺羅を避け、陰かに紳士風に眉を顰めて靜かに永年の後を微笑むものは、何代目某と世襲の永きを數へて不動產の準備に數代の後を按する所の舊派老商に非ずや、而して此前掛け縞羽織一派の豪商は、盲目社會の信用を延くとあらざりし、昨年來銀行一派の或者が稍〻茲に注目する者あるに至りたるは、豈經驗上少しく彼れに敎へたるに非ずや、然れども修道者が求めて顯はるゝを欲せざるが如く、謙遜深慮の豪商は其顯はるゝとを欲せざるなり。今日は正に此新古二豪商が深慮考案すべき時にて、必ずや互ひに一步を讓りて相親しみ相合し、子孫は漸く人道を覺破する者を出し、終に商業道を講じて之を實行し、金錢と道德と相調和するものたるを實行上に目擊せしめ、未覺の子弟を致導して大に氣風を改革するの時近きを見るなるべし、然らずんば金錢に醉倒せる商業界は、日に月に薄利に傾きて支出相償はず、止むを得ず狡猾詐謀の手段益々行はるゝに至り、互ひの信用地に墮ちて相譏り相噬み、人心いよ〱慘酷無慈悲に流れて不景氣日に逼迫し、終には大手腕を有ちたる外國巨商に襲擊せられて、金錢の武器に滅裂せらるゝに至るや必せり、是れ昭々たる天理の常道なり、即ち世界全局面より見れば、之れ一部分の腐敗を改革するの必要たればなり、豈外商の不德義ならんや、實に天の命令たるなり、思ふて爰に至れば慄然として筆戰くを覺ふ。

人は光陰を徒らにせざれば齡ひには若かくとも時間には老ひたりといふを得、されどもこは稀有の事にて青年の思慮は大抵第一に浮ぶ考への如し、第一に浮ぶ考へは第二に來る考へに其成熟及びがたし、こは齡ひに老少あると共に考へにも亦老少はあるものなり、されど青年の發明する所は老ひたる人より更に活潑なり、而して想像の浮かむとも尙ほ亦活潑にして殆んど妙機に當ることあり。

# 批評

## 「罪と罰」の殺人罪

透谷子

不知庵主人の譯に成りし罪と罰に對する批評仲々に盛なりとは聞けるが、病氣其他の事ありて余が今日までに見たるは僅に四五種のみ、而して其中にも學海先生が國民の友に掲げられし評文は特に見目立ちて見えぬ。余は平生學海居士が儒家らしき文氣と馬琴を承けたる健筆に欽羨するものなるが、罪と罰に對する居士の評文の餘りに居士を代表する事の多きには聊か當惑するところなき能はざりし。

居士は、人命犯には必らず萬已むを得ざる原因ある事を言ひ、財主の老婆が、貪慾を憤ふるのみの一事にして忽ち殺意を生ずるは殺人犯の原因としては甚だ淺薄なりと言ひ、而して自ら辨じて言はるゝは、作者の趣意は、殺人犯を犯したる人物は、その犯後いかなる思想を抱くやらんと心を用ひて推測り精微の情を寫して己が才力を著はさんとするのみと。再び曰く、その原因の如きはもとより心を置くにあらずと。末段更に、財主の妹を殺したる一條を難じて「その氣質はかねて聞たる正直質樸のものたるに、これをも殺したるはいかにぞや……さてはのち我にかへりて大にこれを痛み悔ゆべきに、云々と言はれたり。

余は學海居士の批評に對して無用の辨を費やさんとするものにあらず、右に引きたるは、居士の批評法の如何に儒教的なるや、いかに勸善懲惡的なるやを示さんとしたるのみ、居士には居士の定見あり、そを評論せんは一朝一夕の業にはあらじ。

余は「罪と罰」第一卷を通讀すること前後二回せしが、その通讀の際極めて面白しと思ひたるは、殺人罪の原因のいかにも綿密に精微に畫出せられたる事なり、もし或兇漢ありて或貞婦を殺し、而して後に或義士の一撃に斃れたりと書かば事理分明にして面白かるべしと雖、罪と罰の殺人罪は、この規矩には外れながら、なほ幾倍の面白味を備へてあるなり。

一醉漢ありて酒毒の爲に神經を錯亂せられ、これが爲に自殺するに至りたる事ある時は、彼は酒故に自殺したりと言ふを躊躇せざるべし、酒は即ち自殺の原因なり。一頑漢ありて、社會の制裁と運命の自然なる威力に從順なる事能はず、これ

が爲に人には擯けられ、世には捨てられ、事業を愚弄し、人間をくだらぬものとし、階級秩序の如きをうるさきものとし、誠愛誠實を無益のものと思ひ、無暗に人を疑ひ、矢鱈に天を恨み、その極遂に精神の和を破りて行ふべからざる事を行ひ自ら知らざる程の惡事を爲遂ぐる事あらば、其惡事例へば殺人罪の如き惡事は意味もなく、原因も無きものと云ふを得べきや、之を心理的に解剖して仔細に其罪惡の成立に至までの道程を描きたる一書を淺薄なりとして斥くる事を得べきや。殺人罪は必らずしも或見ゆべき原因によりて成立つものにあらざるなり、必らずしも酬報の理論若くは勸善懲惡の算法より割出し得るものにあらざるなり、我が「罪と罰」一卷に見るところのもの全篇悉く慘憺たる血くさき殺戮の跡を印するを認むるなり、見よ飲酒は彼非職官吏を殺しつゝあるにあらずや非職官吏の放蕩懶惰は其愛らしき妻を殺しつゝあるにあらずや其無邪氣の娘を殺しつゝあるにあらずや、娼賣と名け肺病と名け、懶慢と名つくるもの、これ實に精神的に死してあるなり殺してあるなり、悲哀懊惱の幽暗なる事は「死の幽暗なるよりも多きなり。讀者余が言を信ぜずは罪と罰に就きて、更に其他の記事を精讀せられよ、思ひ盖し半に過ぎんか。

余が前號の批評にも云ひし如く罪と罰とは最暗黑の露國を寫したるものにてあるからに馬琴の想像的俠勇談にある如く或復讐或忠孝等の故を以て殺人罪を犯さしめたるものにあらざることと分明なり。最暗黑の社會にいかにおそろしき魔力の潜むありて學問はあり分別ある腦髓の中に、學問なく分別なきものすら企つることを躊躇ふべきほどの惡事をたくらましめたるかを現はすは蓋しこの書の主眼なり。而して斯の如く偶然の機會よりして偶然の殺戮を見得るが故に、一見して淺薄にして原因もなきものゝ種なる、この書の眞價は實に右に述べたる魔力の所業を妙寫したるに於て存するのみ。もしこの評眼をもちて財主の妹を財主と共に虐殺したる一節を讀まば、作者の用意の如何に非凡なるかを見るに惑はぬなるべし。

作者は何が故にラスコーリニコフが氣鬱病に罹りたるやを語らず開卷第一に其下宿住居を點出せり、これらをも原因ある病氣と言て斥けたらんには、この書の妙所は終にいづれにか存せんや。何が故に私宅教授の口がありても錢取道を考へ

ず、下宿屋の婢に、何を爲て居ると問はれて、考へる事を爲て居ると驚かしたるや。何が故に、淫賣女に罪を行ふ資本と知りながら、香水料の慈悲を爲せしや、何が故に少娘を困厄せしめし悪漢をうちひしぐなどの正義ありて、而して己れ自ら人を殺すほどの悪事を爲せしや、何が故に極めて正直なる心を以て、極めて愛情にひかさるべき性情を以て而して母と妹の愛情を冷笑するに至りしや、何が故に一人の益なきものを殺して多人數を益する事を得ば悪しき事なしといふ立派なる理論をもちながら流用する事覺束なき装飾品數個を奪ひしのみにして立去るに至りしか、何が故にこの装飾品を奪ふは單に斬取强盗の所爲にして苟くも理論を搆へたる大學生の爲すべからざるところなるを忘れしか、是等の凡ての撞着、是等の凡ての調子はづれ、是等の凡ての錯亂、は即ち作者が精神を籠めて脚色したるもの、而して其殺人罪を犯すに至りたるも、實に是れ、この錯亂、この調子はづれ、この撞着より起りしにあらずんばあらず。而して斯くこの書の主人公を動かせしものは即ち無形の社會而已なることを云を須たず。運命人間の形を刻めり、境遇人間の姿を作れり、不可見の苦繩人間の手足を縛せり、不可聞の魔語人間の耳朶を穿てり、信仰なきの人、自立なきの人、寛裕なきの人、往々にして極めて恐れむべき悲觀に陷ることあるなり、之に加ふるに頑愚の迷信あり、誤謬の理論あり、惑溺の癡心あり、無憑の恐怖あり、盲目の驕慢あり、涯なき天と底なき地の間に

What a poor wretched cleature as I am,
Creeping between heaven and Earth.

と絶叫するもの、豈ハムレツトのみならんや。

來島某、津田某、等のいかに憐れむべき最後を爲したるやを知るものは、罪と罰の殺人の原因を淺薄なりと笑ひて斥くるやうの事なかるべし、利慾よりならず、名譽よりならず、迷信よりならず、而して別に或誤謬の存するあるにもあらずしてこの殺人の罪を犯す、世に普通なるにあらずして、しかも普通なる理由によつてなり、これを寫す極めて難し、これを讀むものも亦た其心して讀まざる可からず、涙香子探偵小說の如く俗を喜ばすものにてなき由を承知して一讀せば自ら妙味を發見すべきなり、余はこの書を讀者に推薦するを憚らず、學海居士の評文の目に付きたるも之を以てなり。（夜晩く時

少なく文意悉さず之を諒せよ)

## 尾花集 (露伴子著)

透谷子

尾花集は五重塔と血紅星とを合綴したる幸田露伴の著作なり。余は五重塔に就きて見るところを述べむ。

その哲理の潜むところは往年の作一口劔と趣を同じうするを見る。弱者の精神の、或刺激に遭ひて昂揚する事、其一なり。質樸愚直の中に、大に鬱積する氣魂ある事其二なり。或一事業に獻身して大勇猛の精力をあらはす事其三なり。然れども彼輕薄なる阿蘭に換ふるに、清洒にして篤實なる阿吉あり、コンモン、センス、の顯著なる阿波あり、又た彼と此とは舞臺の上に大なる差異もあり。同一の哲理を異趣の方向に寫したる事は明なり。

のつそりの十兵衛愛すべき男なり、侠氣の源太味ひある棟梁なり、この二個の性質のあからさまに紙上に躍如たるは流石露伴子の健筆なり。而して別に奥底に控へさせたるは宗教的聖淨の觀念、之れに對する不淨不善の精神的生存物(飛天夜叉王の如き)等にして、これらの奥妙なる想念と雄大高壯なる筆法とは理想家としての露伴を想見するに餘あり。

棟梁の源太尤も穩當に江戸時代の侠氣をうつせり。一のエキザッゲレーションらしきところ、ドラマチカルらしきところあるを認めず、作者用心の深きを思ふべし。辻淨瑠理の癖作に比して幾段のありがたさを感じたるは評者ばかりかは。

# 小説

## ローレンス

インチエロー作

若松しづ子譯

### 第一回

自分は彼の孃に愛されて居ないと承知しては居り升たが、戀仇がありと知らぬ中は起居安穩やかに、戀愛が苦痛とは化しませんかつた。性質は極く謙遜で、自ら敬虔の風が備はり、尤も開闊、豪毅で、物事に屈し臆する處なく、天地の樂しき方面を見るたちでした。それ故始めて彼の孃に出逢ひ升た時一度かふと觀察を下して、あとは甚だ敷心に恥ち升たどうぞ

もつと立派な人間になり度と思ふにつけ、既往に拭ひ消し度となどが多く出來升た。これは塵に穢れぬ純白な姫百合の美しさ、可愛らしさが壯年の理想を高めて、清く尊きとを慕ひ、渇望する樣に且つ一方より己が歩まねばならぬ世の姦惡なるを思ふて隱かに恥らう樣に導きたい故でした。孃の如き潔きものには世の塵埃も近づき得ず、不可思議なる神通力もて淸く安全なる道に悠々歩を進むるかと思はれ升た。

壯年は麗朗かる婦人を其まゝ、備へりと想像する美德を其まま金冠をさゝげつゝ己が心の女王とあがめ、始めて位坐に進むると共に理想に適はぬものは大方拂ひ淸めて、思想は稍く高尙になり行升た。孃自らはそれと知らぬ中に壯年は孃を手本とし、孃のかくと理想したものにいよ〳〵似る樣になり升た。

さて壯年は老夫婦二人が寵愛の孫息子、しかも有福で實直一方の豪農が自慢の相續人でした。此老夫の間に設けたはたつた一人の愛娘で、これが生長するに隨つて、夫婦は結合して他へは嫁らず、本家へ添へて、美事に廣々と立増しをし、聟て結婚もさせ、生れた子供も共々賑やかに暮らさせる心算を定めて置き升た。娘は花の盛りの年頃を超さず、さて傳道師と結婚をいたし升た、これ貧乏でこそあれ、容貌人に優れ、生立も風采も品の好き壯年でしたが、兼ての自論見通り妻の家に迎へられて住居いたし升た。

幸福なる年月の進行殊に早く、間もない中に新築には子供が一杯になり升た。四人といふ子供揃ひに賑は敷暮らす中に近邊に熱病が流行して、殊に惡疫は貧民の中に蔓延いたし升た義務を怠るとを知らぬ傳道師は有毒なる雲霧を侵して、病者と共に祈り死亡者を葬ひなどして居り升たが遂に自分が流熱に罹り升た。輕からぬ病症に枕重く、殆んど死に近くなり升たが、辛じて頭を擡げる時分には美敷生立つた中で生存じたはたつた一人でした。娘どもは三人とも冷たき土饅頭の下に眠り、總領の息子已ながらへて居り升た。

弱り果たる妻は此非常なる厄難を忍ぶに餘り靜かでしたから傍の人は始めには訝り遂に其心中に蟠まる悲哀を切めては涙に洩させて堪難き切なさを慰めやうと、自分等が先づ強いて悲痛の樣を見せ升た。然るに妻はたゞ靜かに嘆息して、「此身を煩はして下さり升な、久しく永らへませぬに」と申升た。

かふ聞く母親は身戰ひして、「これさ、娘、其中必ず心の慰まることが有らう、今度生れる赤ん坊の顏を見たら、キット心遣りになり升よ」といひ升た。

其顏を見るまで生て居られませんと答へ升たが、暫らくする中に、案に相違して、安々と女の子を產み落し升た。併し弱々敷瘠せた赤子でした。それより母親は急に心忙敷なり、眼の光りさへたゞならず頻りに暖い國へ轉地し度と哀れ氣に賴み始め升た、かふいひ升た「どうぞ南の方へ連れて行て下さいまし、この樣なきやしやな赤ん坊はこの寒氣に迚も堪ることでは有ません、どふしてこの樣な淋しい恐しい空の下に無事に生長することが出來ませうと。そこで家內一同南へ向いてかしま立致し升たが、過去の憂を思ひ、來らんとする憂を想ふて、はかぐ\敷物いふ人さへありませんかつた。然るに白浪たゝぬ靑海原に添ふた閑靜な庭もせにいかふ中に冷かな心も幾分か溫まり、苦痛の幾分も漸々愈へ、しばしの程は萬事都合よく行さうでしたが、これも暫時のことで、ある日蜜柑の樹の下に休んで居り升て、妻は赤子を抱いて靜かに坐つて居り升た處が、水仙の花を盛つた籠を頭に載せた女が來掛り升て、籠を下へ下ろし氣の毒さうな顏つきして、一寸止り尙近づいて身をかゞめ、果ては顏色靑ざめ、たゞ事ならぬ一大事と胸を躍らし升た。何事かといふに、母の膝に有つた赤子が誰も知らず、氣つかぬ中に絕命して居つたのでした。

さなくともいとゞ氣弱りのした母はこのなり行に心は全く挫け果て、あとは永ふる氣力がなくなり升た。切なき其情を思ひ遣て、家內のものはかく行んと望み、悅んで行くものを强いて止んは心なき業とて、命乞もせず、たゞ恐れ畏れて、其終焉を見屆け升た。あとに三人は他にせん術もなく、男子一人を引連れて、元住み慣れた家に歸り升た。父と母は絕えず娘の噂をいたし升たが、夫は其後決して其名を口へ出しませんかつた。己が天職を守つて、これより慰めを得、心を委ねて獨兒を敎育いたしました。この通にして年月を過す中に、祖父は他の二人を勸て、かふいひ升た「モゥあれは手離すが宜しからう必ずあれの爲になるに相違ない、家に置いては獨り大將で自分もよふく存じて居るから、何でも學校を撰んで、正則に勉強させ、立派な紳士になる敎育をうけさせるが何よりだと。

祖父の言葉が行はれて、子供はさる學校へ入塾することになり休暇から休暇のあひ〳〵には祖父祖母が見たい〳〵で暮らす中に、はや十八歳といふ年になり升た。父は殊の外息子を愛して、矢張り牧師にし度と思ひ升たが、祖母は敢て異儀をとなへ升た「いや〳〵大學へ遣ればよくないことを見ならひ、借財を拵らへるさうな、子供を大學へ遣る人はあとで後悔するが多い」といふを祖父が遮つてなんでも謹愼で嚴肅な學者を見つけて、それにつけるが宜しい、男の子は若い中旅をさせて早く落つかせ、嫁をとらせる樣にせんではならぬ、少し旅行して世の中を見んでは甘んじて身を定めることではない、イヤハヤ！わしの若い時も旅といふものして見度思つたが、とう〳〵出來ずじまひで有つた………兎角やるが好からうといひましたが、其中幸に敬虔で、信神の深い人で託す可き人も出來て祖父の憐が又々用ゐられる樣に成りました。父は、注意に注意を加へて師を撰んだのでしたが、昔ものなる祖母は、其人がどふやら若過る樣なと思ひ升た。實際此人は秘藏な孫息にと十年は違ず、同じ樣に旅行好で、雪も沙漠も、大洋も物の數とせぬ威勢は二人かはつたとは有ませんかつた。

# 富貴

機の家綾織

## 詫び住居（五）

夫人女童に向ひて云ふ「はや今日は琴をば學び終りぬ、御身遊びには出でずや。霞たち春は來て日も永くなりぬ。靜子さへも音づれぬにはあらずや。」女童答へて云ふ「靜子は今日母と共に新しく調じたる春着を着て花を見にゆくときゝぬ。」「さなりや世の人はみな樂しみあれど我等はかく田舍めきた

る所にしつらひたる詫しき住家にとぢこめてさらぬだに心憂きに我は夜毎涙の袖をうるほすゝ。今日は殊によき日よりなれば我も公園のわたりまで御身を伴なひてゆかん。先づ少し髪を整へん。」夫人次の間に入りて鏡に向ひぬ。女童もその傍に坐りぬ。

「見よ、我が面影のいたくやつれたることを、我は早三十路四十路を越へたる心地になりぬ、今は何の望みも願ひもなし、學びの窓にありしころは書を讀むをたしなみて晷のうつるを惜しみしに今は辛ふじて一日をくらすやうになりけり。………

…いざ御身が髪をも少しくときつけん。」

夫人女童を伴ひて門を出づればいとのどかなる春景色なり。

道の邊の草は萠え出でゝ、陽炎もえ、袖ふりはへて花見にゆき行く人の彼處此處に見ゆる、二人はしづかに歩みて公園にゆきて見れば櫻は半ば開き池水にたる、千條のしだれ柳の間に見ゆる樓には絃の音あり、

夫人は女童とともに櫻屋と呼ぶ茶屋に來て憩ひぬ。

道行く人云ふ「公園の花の色は昔にかはらで春ごとも美はし。我は今年齢八十 髪は麻のやうに腰は弓張りになりぬ。かしこに物の音の聞ゆるは誰が子等ぞや、我れ年二十のころいと心たけき若者なりき同じ友どちと此處に打ち集ひ杯をとばし哀れなる歌を唱ひしが彼等は盡く 幻 の如く消え去りぬ。我も亦花見ることは今年の今日をかぎりならん。いざ家路にいそがん孫どもの我を待ちてあるべし。」「かしこをゆくは何處の祖父にや、くだ〳〵の家土産を得てかへりゆく、我は妻なく子なく我を待者もなければ此瓢の空しきまで遊て歸らん、我は我を打ち忘れてうつら〳〵と夢のようになりけり。」

「我は去年の秋よりジアーマンを學びつゝあり。」「かくして君が望みは」。「我は哲學者となるべし。」

「…………ケンブリッチへか、又はベルリンへか」。「ケンブリッチ。」「…………されど我はイギリスの用ひを先きとすることを娠くむ、君は如何と思ふ…………」

「世の人は皆錦を身にまとへり、我れ衣破れて膚さむし、靴はきれぬ。帽子はよごれぬ、人目もはづかし、いざいそぎて庵に歸べし。人は我を嘲りつゝゆくなり、人は我を憂しと思らめど我は樂しく日を送り——親より受たる一棟の草の庵に一万の書卷、足ぬと云ことを知じ、明けても之をながめ、暮れても之をながむる、こは 古 の人の歌物語の中に笑可げに作りにし

笑可げに作りにしことどもにも似たるかな。」「げに今日はいとよく晴渡りたる春日かな昨日我が下屋敷なる屋守りより花は大方は咲きぬと云ひおこせたれば明日は朝まだき母上姉上とともにゆかんとせり、歌を讀み骨牌を鬪はせんと思へど友なきに困じぬ、もし君等二人の來玉はゞいとも我等が幸ならん。」「忝なし必ず詣るべし、文子の君はいかに。」「我も詣らん、此頃得たる我が白き駒に乘りてゆかん。」夫人女童にかたりて云ふ「人は皆面白げにも見ゆるかな、見よ彼等は己がじゝいろ／＼の樂あり望みもあれど我が如き悲をのみもたるものはなからん、伯爵は再びかへり來玉ふ日なし、我れ片時だも憂をえ忘るゝ時やは有べき、富貴の身も亦あぢきなきものにはなりけり。日もやう／＼永く暖なる空となりたれば我れ御身を伴ひて伯爵が失せ玉ひし戰場に下りて其墓に詣でゝなき跡を弔はんと思ふ。」

## 墓參り　（五）

老ひたる旅籠屋の主人は夫人に向ひて云ふ「君、如何にし玉ひしやいと苦げに見ゆ。」夫人云ふ「我れなれぬ身の今日は多くの山坂を打ち越えて來にければ少しく胸くるしく覺ゆ。」「そはいと憂きことなり速かに醫師をよびに遣はさん、且つ我が妻にても來らせん」とて出でぬ。

やがて主人の妻なる媼の來て田舍人の習ひとていとまめ／＼しく介抱しぬ、又話し出て云ふ「去年の冬の戰爭には此わたりの烈きいとも甚しかりき、此戰に失せたる人の親腹からなどの尋ね來るものいと多きが夫人も亦かゝる事のために來玉ひしにはあらずや。」女童代りて答へて云ふ「さることなり、葵川伯爵が墓の此わたりの寺にありと聞く御身そを知ずや。」「そは此家の裏より見ゆる山の裾なる尼寺の内にありてこの頃成りたるいと大なる石碑の立り。」夫人云ふ「かく聞ばいと懷かしく思はるゝ、女童、御身人に導かれて今宵その墓に詣でゝ我が今日こゝに來りしことを告げて來よ。」媼云ふ「されば我が家の婢と下部とに案内せさせん」とて女童を伴なひて出でぬ。

醫師きたりて夫人を診して云ふ「こはいと恐るべきことどもなりき、かゝるかよわき身の今日山路を歩み玉ひしと聞く、危きこともやありつらん、五日六日は靜に休みて居玉ふべし。我れ思ふに夫人は學びの窓にありしとき夜も睡むり足らず力にあ

まる勉めを爲し玉ひしともあらん、いたく肺を傷なひ玉ひし、速かに癒し玉はずば大なる惱みとならん。さらばかへりて藥を調へて參らせん」とて去りぬ。

夫人歎きて云ふ「アーこは何の報ひなるらん我運命のつたなきことよ、我れかゝる悲みに沈まんとは夢にだに思はざりしものを。我れやんごとなき身となることを得ざればいみじき詩人となりて末の世に朽ちせぬ名を止めんとて勵みしもの今みなかゝることとはなりぬ、こは何の報なるらん。」

しばらくありて女童はかへり來て夫人に告て云ふ「この家の瀬戸なるすごき藪の中を通りぬけて田中の道をゆくとき下部指さして彼處に官軍の陣を張りたる所ありと云ひぬ、遙かに浦田の中に茂りたる松の唯一本見えけり。寺に至りて見にいと小さき建物なりし、墓場には新しき石碑も多く見えて伯爵のはいと高く我をながめ玉ふに似りき、半ば朽て枯たる柳の下に立ちたり、我其前に煎香を焼き頷つきて君が仰せの如く告げて來ぬ。」夫人云ふ「かゝるものすごき所に睡むり玉ふか、我も亦速かに死出路の供をせん、今宵殊にくるしく肺の病と聞けば我が生命はいくよしもあらじと思ふ、速かに伯爵が傍に行かまほし、かの凄き墓場こそいと懷かしけれ」

嫗又きたりて夫人が枕邊に坐りて守り居けるに夜は十一時をすぎ家の内もよう〳〵靜になりけるに隣りの家にて書讀む聲の聞えけり、夫人耳を傾けて之を聞けば獨逸を讀むなりき。夫人嫗に向ひて問ふ「かゝる片田舍に獨逸文讀む人は誰ぞや。」「こは我等を敎へ玉ふ師の君なり、かの君は夜毎かく夜深るまで書讀み玉ふ、かの君の常に我等に敎へて云ひけるは我等もし天つ神を信じ行ひを正くしたらんには世の終りに至りて裁判の日に極樂に上ることを得ると云ひぬ、都人はかゝることどもはよく知りて居玉ふならん、されば夫人などが死を恐れ玉はんや。」「その人の名は。」「遠藤の君とよぶ。」「そは我が從弟なりし、アー彼はかゝる靜かなる山里にありて今も神の道を樂みつゝあるか、今ぞ知りける彼が得たる神の敎の樂は消ゆる時なく我がまふけし富貴はかゝる詫しきものとなることぞ。」

# 雜録

## 青年と英雄傳記

畜翻子

青年の傳記を快讀する者稍多しと雖ども、眼孔紙背に徹し、是の傳記中の生命を尋ぬるに至りてや甚だ難し。余此頃押川方義君を訪ふ、談偶々現時の青年が風潮に及ぶ。君曰く、當時の青年稍もすれば、學問を勉めずして、智識を輕んじ、徒らに精神のみを鼓舞し、意志のみを振起し、心膽のみを養はんとを是れ勉むるに至りては、其人竟に無識無能の空物にて畢らんのみ、そも學者の稱號は貴とからざるも、學者が學問は甚だ貴し、それ何職業たるを問はず、一事に達し、一業に精なるものは、自然に其人に功あり能ありて、尊とむべきなり。人物の修養もまたその成し易き學問を怠るものにして、世の弊根改革に當ると何ぞ彼等の容易に成し得べき事ならんや、人物たるに道あり順序ありて、初めは學問にして所謂智識なり、次に實行に遷りて、それより心に入る、實行は所謂事業なり、心は所謂聖賢の心を云ふなり、尤も、學、行、心、の區別あるにあらず一貫したるなりと。又曰く書籍は死物なり、然れども聖賢の心に入りて尋ぬれば、書籍中には、釋迦あり、孔子あり、保羅あり、マホメットありて、彼等皆な我が心友にして、其意見を叩くべしと。又此頃松村介石君の稿にかゝるもの青年會報に掲ぐ、今其要を摘擧すれば。

『余惟ふに凡そ青年にして眞正の人物たるの道を學ばんと欲するものは、先づ斯く覺悟して可なるべし、曰く、初學のものは徒に英雄を語るべからず又慢然と聖賢を望むべからず只管學問に從事せよ讀書に從事せよ。吉田松蔭嘗て其學生に示して曰く「自非讀萬卷之書寧得千秋之人」と是れ初學の最も心得べき警語とす、英雄たらんと欲するものも聖賢たらんと欲するものも、無學不文にして其の能く英雄たり聖賢たるものあるを聞かず』佐藤一齋嘗て朱子道學の順序を説て曰く初めには文を學び、中には行を學び、終りには心を學ぶと。文は所謂學問なり、行は所謂意志心膽の發したるもの、而して心は即ち聖賢の心を云ふなり。故に初學の青年あり、來りて人物たるの道を尋ぬるときに

は先づ之に告ぐるに讀書學問の道を以てすべし、智識を輕んじ學問を蔑如するものたらんには到底人物たるの道を語るに足らず、彼等は來りて人物たるの道を余に尋ね、已に之を余に尋ぬるを知る、寧ぞ往て之を書籍に尋ねざる『然れども或者の如く、徒に博聞多識を勉め、文字を講じ、意義を說くのみにて止むときは竟に空しく物知りたりて止まん』此故に書を讀み意義を學ぶ其次には更に歩一歩進めて宜しく『行』と『心』とを學ぶべきなり。』云々。

余押川松村二君の時感斯の如く同一に出でたるを喜ぶ。

抑々青年が英雄 傳記を讀みて、燦然たる功名の事跡を尋ね、英雄に粉裝し、豪傑の模倣のみ是れ勉め、一に他に擬して以て千載に及ぼさば、彼等が未發の賜物を無にするを惜む、ろも聖賢の傳記は吾人に信仰を與へ希望を與へ、古人と血肉を同うし、來歴を同うし、古人と生命を同うす、傳記は古人の墳墓中より發して我を教示するの音聲なり、聖賢の傳記は我に其當然なる道路を示せり。諺に曰く、薔薇の吾中に植ざりし前、我は尋常の泥土なりしと。孟子曰く聖人は百世の師なりと。例へば彼のワシントンの如き、彼は革命の將軍平和の統領として此巨人を知りたりと爲さず、彼は甚だ才能ありて專心勉力、殊に事務に長じたり。彼が品行常度ありて始終一の如きと、及び堅固緻密なりしと、及び勤堅にして力量ありしと、皆職分を盡すの精神に歸せずんばあらず。而して最も彼が眞面目を覗ふべきは、千七百九十八年、其身老を告げてウエルノン山に退隱して、農に歸せしとなりとす。彼のクロムウエルの鉄騎隊は夕べに凱歌を奏して、朝には鋤を擔ひ出でゝは田圃に耕す。西郷南洲は駄馬を索きひて、偶々途上に於て鄉黨に會ふ、鄉黨は百姓と思ひて己が履し下駄の鼻緒の切れたるを立よと命ず、南洲恭々しく彼が下駄の鼻緒を立つ、嗚呼平凡磊々英雄の眞面目、愛すべくして學ぶべからず。青年の英雄聖賢の傳記を痛讀するもの、又實に佐藤一齋の言の如く、文より、行、行より、心即ち聖賢の心に達し得べきなり。倘進んでクライストにまで達し得べきなり、然らば英雄たると農夫たると、官吏たると車夫たると、そのなす所の事業の何たるを問ず、皆一にして、我靈魂は宇宙に充ち、六合我靈中に宿るべきを知る。

〰〰〰〰〰〰

## 山木覺馬氏の逝去

淡海子

聞く、君は舊會津の藩士にして、維新に際し、大に徳川家のために盡す、君の戰略精巧にして、殊に砲術に長ず、官軍東征するに方りては、東北の軍揮はずして、君は薩藩のために遂に捕はるゝ所となり、後京都に送らる、當時君既に肉眼の明を失ひて、洛陽に閑居す、明治初年に擧られ、京都府知事の顧問となる、君は既に眼明を失ひ加之跛者なるも亦、京都府會の議長となる。明治七年故新嶋襄氏大志を齎し歸朝の時、私立大學設立の計畫に賛して、相提携して今日の同志社を組織せらるゝに至る、君は副社長の任にありて、同志社の爲に盡すと十數年、終に前年病を得て客臘廿八日逝去せられたり。時に年六十有五。嗟呼吾人君を知らずと雖ども、竊に同志社中の隱君子なりと仰げり。今や君は洛東若王子山の松林に新嶋襄氏の塋傍に埋まる、嗟呼松風永く相和して、其悲調を跡す嗚呼。

## 片々

淡海子編

●早稻田專門學校靑年會　同靑年會は追々盛況に向へる樣子にて、目下會員四十餘名となれり、昨年十二月十七日には、押川方義、松村介石二氏を聘して、講堂に演說會を開かれたり、押川氏の忠孝論を演ぜらるゝや、聽衆中反對をなすものありて、一時囂々たらんとせしが、氏が眞摯執烈の雄辨に壓倒せられて、遂に靜聽したりといふ。

●東京基督敎徒靑年會　の幹事ミロル、丹羽淸次郎の二氏は舊臘廿三日當地を出發京阪神を始め名古屋等の靑年會に巡回されたり。

●全國禁酒同盟會　は舊臘十七日銀坐會館に於て開かれ、會長は安藤太郎氏を推し、全國各禁酒會の聯絡を通じ以て、一致の運動を爲さんがために、同盟會本部を東京に置くに決したり、各地の代表者は。日本禁酒會、林蓊、二宮安治。京都有志者、竹內種太郎。帝國禁酒會、吉植庄一郎、宮澤睦太。仙臺禁酒會、松本殖吾。東洋の日の丸宮、會下盛尹。婦人矯風會、矢嶋楫、藤田きよ。東京禁酒會、安藤太郎、根本正、美山貫一、小方仙之助、渡邊喜十郎、小嶋官吾、長野硏、臨井文三、渡邊鼎三郎、北海道禁酒會、中村邦佐。四日市、駒井宮代。其他池田次郎吉、永川永輝。等の諸氏なり。

●山梨縣桂村の靑年夜學會　同地の信徒分部盛之氏の發起にて、有望の會員拾數名にて夜學會を開かれけるが、分部友三郎氏等の盡力にて此會の益々發達に赴けり

●東京靑年會のスウヒフト氏　は愛知基督敎靑年同盟會へ、三十年史、神學の大原理、吉田松陰傳等十六種の書籍を寄贈せられたり。

●甲府禁酒會　甲府の禁酒會員は二月中旬頃東京より、イビー氏を聘し禁酒演說及び幻燈會を開かんとの計畫あり、イビー氏は既に來峽を承諾せり。

●川上靑年硏究會　は丹波國熊野郡川上村の團結にして、其會員は村內有名の士十餘名を以て成る、元來同村は山間の一隅にありて、其民從て未開にして、種々の惡き風習ありしが今は之が跡を斷ちしに至りたるは、全く硏究會員の其非を矯へ。

しに因すんばあらず、又僻地の常として女子の就學に大なる差異を生じ、男子の廿分の一にも當らざりしが、一昨年來會員の各區に屢々演說會を開き、女子教育の必要を論破せしより近來大に其數を增したり、然れども會員は之に滿足せず、農民閑暇の期節には、更に氣談を張らんと意氣込居れり、

●熊本青年會　熊本に於ける基督徒は團結を成して、青年會を組織せりと、聞く處によれば其運動は廿六年始よりまらんとす、

●廣嶋青年會　今回、山中左、吉田芝治、坂本勉の諸氏發起にて、同市大手町三丁目七十一番邸に、青年會館を設け、有志者の寄附を得て、「青森新聞の縱覽所を館內に上げられたり。

●四條教會青年會　京都四條教會の青年は僅々二十餘名の小團隊なれども、實地に教會の事業を裨益する事を旨とし、來會者の案內、教會の掃除等より、ランプを拭く事、庭を清むる事、すべて進んで之に任じ、今は小使をさへ用ひざるとさなれり、又他日教會新築の準備を供へんとて、月々少しづゝの金を集め居れり、此度同會の發起により、隔月一回の說教を催ほして、專ら求道者を警醒する事となれり。

●高等商業學校基督教青年會合場　本會俱樂部は當分の內麴町區富士見町二丁目三十二番地本會々員上領純一氏方に置く、會員は本校教員及學生を校內員となし、卒業生及本會に緣故あるものを校外員となす、現在校內員十八名校外生二十三名、役員會長、江口定條氏、外副會長壹名、會計壹名書記二名、集合委員五名あり、集會每年九月學年の初に於て大會を開き、平常每月二回例會を開き、祈禱感話をなす事となり居りしも、近來々會者甚少なきを以て今回右二回の例會に易ふるに、二ヶ月一回の來會を以てし、祈禱感話を兼て親睦會をなすの却て相互の交情を深くし、大に利益ある事を知り、乃ち其第一回を本月十八日午後五時より、麴町區飯田町仁泉亭に開く、會する者十二名、會長江口氏の祈禱を以て會を始め、櫻井氏の祈禱を以て會を閉づ、此間種々必要なる議事有益なる感話熱心なる祈禱ありたり、右終りて隨意遊戲談笑の間に十二分の歡を盡くして、會を散ぜしは十時中なりき、只惜らくは時學期試驗後に際し、會員中歸鄕或は旅行せし者頗る多く來會少なかりし事なり。同日議决せし事項中尤も記憶すべきは、本會運動の方針に就き一新路を見出せし事之れなり、乃ち是迄は重に校內に向て運動を試み來りしも、自今之と同時に校外特に地方にありて、我校に入學の目的を有せらるゝ青年諸氏の爲めには、本會は可出來丈の勞を取り其人々の便宜を謀る事之れなり、故に我校へ入學の事に付詳細を知んとする諸君は前述會員上領氏か、或は本校宛同氏まで下問あらば喜んで貴意に應ずべし、

●佛國の基督教徒青年會　佛國の基督教徒青年會は、過般東方佛蘭西の某處に於て其大會を開きしが、英國よりは其創立者たるジョルジ、ウイリアムス氏を始めとし多くの有名なる人々出席せり、其時の報告によれば佛國に於ける青年會の事業は、近來大に盛況に向ひ新なる會は續々として起り、會員の數も亦た非常なる增加を爲せりと、又た巴里の同會は目下凡そ二十万弗の費用にて新會館の建築中なりと云ふ。

●シカゴ青年會とウイシヤルド氏　去る十一月曾て日本に渡來し青年會に盡力奔走せし、ウイシヤルド氏は、海外青年會運動の有樣及び彼等の內に青年會運動の必要を演說し、大に米國青年をして心を外國青年運動の爲めに盡力する熱心を起さしめたり、氏は前后八回同主意を以て演說せしと云ふ、又たシカゴ青年會理事集會席に於て、ウイシヤルド氏は、殊に東京青年會館建築の爲め資金を募集すべきことを主張し、シカゴ青年會は此れが爲めに大に盡力すと云ふ。（以上七件青年會月報）

●救世軍　は去る十一月廿一日より三日間ニウヨルク市に於て大集會を催ふし、米國にて既存せる多數の男女救濟法を講じ、続れて一千五百人の佐官就職式を行へり。同會の報告によるに、現時英國に二千〇八十四の團隊と一万一千〇五十六人の佐官を有し、週刊雜誌三十一種、月刊雜誌五種あり、其の發賣高四千五百万部なり、又米國には四百六十四の團隊ありとぞ。同軍の機關雜誌「ウナー、クライ」は七万部を發行すといふ。

## ◎福井通信

南越基督教青年會　の創立會は此程福井市春山町の基督教會堂に於て開き、役員を撰舉したるに、會長には香墻殿次郞、會計には林清吉、理事には宮井佳多郞の三氏當撰し、來る第二土曜を以て、一致教會に於て盛んに發會式を行ふ答也。

撫島仁吉君纂譯　精巧なる肖像入

## 泰西 經濟學者列傳

洋裝本綴　定價金五十錢　不要送費

故の倫敦經濟雜誌記者ベーヂホット曰くアダムスミスの履歴を知るにあらざれば以て其著富國論を解す可らずと嗚呼何ぞ獨り富國論のみならんや諸家の經濟書亦多くは然るなり今や經濟學大に流行し泰西諸家の經濟書續々邦文に翻譯せられたりと雖も未だ諸家の傳を記述せるものなし是此書を發行する所以なり

米國ジョン、ポート氏著　小塚貞義君譯

## 銀貨問題

洋裝假綴　定價金十錢　不要送費

當今銀價下落し世界諸國方に其救濟策に苦めり此書善く其事情を説き且其救濟策を論ぜり
右二書今般出版仕候江湖の諸彦請ふ愛讀を賜へ

發兌　東京京橋區彌左衛門町　經濟雜誌社

賣捌　東京○丸善、小林、敬業社、東京堂、巖々堂●大坂○岡島　梅原●京都○大黒屋●横濱○丸善

二人ノ外國婦人ノ日本語教師兼通辯タルベキ者入用ニ付キ基督教信徒ニシテ英語ヲ解シ之ニ經驗アル婦人ノ御方ハ至急下名ヘ御來談有之度尤モ御當人ハ右二人ト同居シ地方ニ趣クコニ候

一月十二日

麻布區飯倉片町二十八番地

木村方

第三號目次

# 裏錦



每月一回○定價一冊六錢六冊前金三十三錢十二冊前金六十錢市外郵稅一錢

發行所　東京神田區駿河臺北甲賀町十三番地　尙絅社

大賣捌　東京神田區表神保町三番地　東京堂

# ウヰルヘルムテル

## 第一齣

### 第一節 れほあらし

紫苑山人 病中未定稿

海士がすむ苫屋にそひて　志と〳〵と波のうちよす
水湖のいは岸にたちて　はる〳〵と波の上をそく
見渡せば「シユツイツ」の邑の　高樓はのきをつらねて
聳えつゝあたりをみれは　賤がたく里のけぶりは
遠近に森の木の間に　かつ見えてなびきける哉
綠なる牧場はひろく　大空の色をうつして
白妙の雪のかむりを　頂けるみ山は高く
久方の雲井にそびえ　匂ふ日のかげも長閑に
海士が子は獨り小舟に　櫂とりてうたふをきけば
"志ほあびに來よ〳〵と　湖水はそゝのかせども
わらんべは春の花野の　蝶のごとくすしき夢や
むすぶらん波うつ岸に　伏す見ればあはれの笛か
久方の天津處女の　うたふなる聖き歌とや
波の音を想ふなるらむ　酣睡よりさめにし時は
うつ波の胸におよびて　ふかみよりねぶれる者を
子よわれは引き沈ましと　よばふなるらし"
足曳のやまのかひには　牧羊者木魂にひゞく
聲を高みうたふをきけば　"住みなれし小屋よ牧場よ
今れはや夏はいにけり　いざさらば我もたゝなん
ほとゝぎす空に名のりて　千木百樹花てふ花は
一重八重梢〳〵に　さき匂ひ淸き小川の
おどるなる彌生の春の　歸りなば我もふたゝび
此山にたちかへり來ん　すみなれし小屋よ牧場よ
今れはや夏はいにけり　われもたゝなん"
アルペンの山のさつをは　足曳の岩が根たかく
ふみならし弓箭たばさみ　登りつゝうたふをきけば
"鳴るかみは空にとゞろき　丸木ばし谷にふるひぬ
心せよあやしのみちぞ　健氣にも彼はゆくめり

まへうしろ彌生の春も　花さかずみどりのくさの
一もとも生ひぬ氷の　野を分て彼は登りぬ
朧には見ゆる限りは　霧の海立ちさはぎつゝ
折〱に雲の絶間に　はる〱と水の底にし
此の世あ(ゐ)る見ゆ"

* * * * *

大空はくもたちさはぎ　風早やみ地の上のがけは
疾き駒のかけるに似たり　足びきの山のひゞきも
ざわ〱と世の常ならず　舟人は舟ひきあげぬ
羊らは草にあざりて　あらがねの土をさきかき
うろ〱づは水に躍りて　潑々と波のおと高く
水鳥は水をくゞりつ　且浮び羽かぎたゞならず
岩間より下ろす嵐は　あしの葉にさやぎける哉
牧羊者さつをも海士も　もろ共に手を打ちかざし
眺めやり類をあつめ　大あらし今や來らんと
のゝしりて語らふ折しも　忽ちにひとりのをの子

かけ來り流るゝ汗を　ふきもあえず"やよ舟人よ
とく舟をいだしてわれを　たすけてよ"是は何事ぞ
志らまなこ見詰てしばし　人皆はいらへもあえず
徒らに唯打ち見守り　たちにしが衣をそめたる
くれなゐの血しほのあや　故あらんとく語りねと
と問へばメウムカルテンは　答ふらく"ロッスベルヒの
城司とは名のみなりけり　民の仇人の皮きし
獸かも我は今日しも　つねのごと林にいりて
鉞にちからをこめて　木を伐ちぬ折しもあれや
吾妹子は血眼となりて　走り來つ語るをきけば
つかさびと我が家に來り　吾が妻にゆあみのそなへ
とくせよといへば地頭の　仰せごと妻はかしこみ
帶をしめ襷をかけて　こゝろぎのいそぎたちつゝ
水くめば清きこゝろの　水かゞみうつる知らずや
つかさびといかに眼や　濁るらん其の手をとりて
かくしねと磯にありてふ　うつせ貝むなしきことを

いふからに袖ふりさきて　吾が妻は急ぎ來にけり
きくやわが心の火の穂　むら／＼と燃え上りては
中々にをさへもあえず　はが髮は冠をつきつ
わが腕は鉞さげて　ひと走り湯殿にゆきて
民の仇日ごろのおもひ　ひとうちにうてばもろくも
梨の果のわるゝが如く　なりにけりやよ舟人よ
今は早時の移りぬ　とく舟を出だして我を
助けてよわが仇人の　あとおひて今か來るらん
時は迫りぬ"
鳴るかみは雲間をかけり　稲妻は黑くもさきて
凄じく見ゆるものから　舟人は魂きえて
中々に出づるちからも　あら波のなぎてのちまで
吹きあるゝ嵐のはれて　海原の浦安らげく
しづまるをまてとしいへば　皆ともに言葉を合せ
舟人を說きさとしつゝ　"妻もあり子らも有る身を
おもひやりとく舟だしね　わが友よものゝあはれぞ

人皆の守る道なる"　鳴るかみは再びつよく
黑くもの彼方此方に　あらぶれてかけるものから
舟人は"われも同じく　妻と子のしたはるゝなれ
此わらし心ある身の　いかにしてをしや渡らん
人のあるべき"
かきくもる空をあふぎて　跪くペウムガルテンは
梢より落ちし猴か　水を出し轍の鮒か
こと呼ばゝ彼方の岸に　とゞくらし救ひは近く
まのあたり舟もありけり　去かはあれ今は空しく
仇人をまつより外は　なつむしの思ひにもゆる
時しあれアルゲレンのテルは　勇ましく弓箭をとりて
あゆみ來つ亦た舟人を　ときさとし"やよ舟人よ
人皆のなし得ぬ上を　なしてこそその子のわざ
いふべけれいざとくたちて　救ひね"と言をつくして
語らへる折しもあれや　鳴るかみは更にふたゝび
あらぶれて波もさわげば　舟人は身を震ひつゝ

中〲にいづるちからも　見えざれは今は堪えじと
ウヰルヘルム帯ひきしめて　舟よせばバウムガルテンは
躍り上がり救ひの舟に　飛びのりて兩手を合せ
打ち伏せば纜ときて　テールは早櫂をし早め
いひけらく"つかさの力　つよくともわれよく之を
拒がましされど嵐の　力よりたすくるものは
我ならじみえぬ御手にや　まかせてん"斯て後へを
かへりみつ牧羊者に向ひ　"わが友よわれもし人の
常あれば殘りし妻を　慰さめて人の務を
なしにきといひも傳へよ　いざさらばわれ試みん"
あら波のさわぐ波間を　ゆく舟は木の葉のごとく
浮きしづみ逆まく波の　もてあそび千尋の山に
登りては再び千仭の　底におち吼ゆるが如き
波をきりて急ぎゆくめり　人皆なは沖を見やりて
勇ましのますら猛雄よ　今の世のシモン、ユダよと
手を拍ちてほめにける哉　時か命か鞭うちあてゝ

あら駒の蹄めをならし　一群の騎馬武者等は
彼方よりかけ來りしが　はる〲と小手を翳して
あら波のさわぐ沖間を　見やりつゝ齒をかみならし
殘り居し人をのゝしり　"たゞならぬかの罪人を
徒づらにのがせしからに　やよ僕爾れが羊を
みなころし爾れが家をや　燒きうちて上の威光や
示さなん"馬のかしらを　立て直し元と來し路に
はせゆけば皆驚きて　木枯に木の葉のちるが
如くにて右り左りに　思ふまゝ逃にしあとは
磯の波岩ほをかみて　音高み嵐は吼えて
木を倒しいや凄さじ！　荒れにけるかな

## 第三齣

### 第三節　やみのよ

大空を廻ぐる日かげは　九重の御國のうちも
谷蔭の賤がくさやの　軒端にも通ふなりけり

くす玉を碎くがごとき
あざみにも夏の野にさく
をしなべて宿れるものを
なか〳〵に競ひかねつゝ
人みなに頒ちたまひし
『壓制』の律法のくさり
むらきもの心のまゝに
いきながら陰府の審判の
いかにして心あるみの
鳥となり木末にうたひ
もの皆と『自由』の境に
まさるなるらめ
大空をふりさけみれば
白雪のつもり〳〵て
いたゞきに匂ふ日かげの
ほどちかき御料の山は

白露は刑のうちの
姫百合のはなのうへにも
ともすれば『自由』の風の
久方のあまつ御かみの
此の舌も筆をとる手も
最と強くつなぐものから
おもふと動かしえぬは
舌のかせ手かせなるらし
獸だしつゝ忍び得べしや
野を走る毛ものとありて
逍遙遊ぶこそ嬉しきとの

足曳のアルペン山は
狼のきばをむくごと
さむけくも見えにけるかな
森しげみ其下みちは

つねなれば人の往來も
劣らぬと葎しげりて
うづもれつたゞ山鳩の
歌ふなる梢をたかみ
かゝりつゝ木陰を見れば
つきたちて守れる衞士の
あくびしつともに向ひて
うつせみのからにも似る
徒づらにはたの案山子に
かしこしとおぼせ畏み
しかはあれ『自由』の首を
いかにしてかゝるわざを
罪のなき人なとがめぞ
我とてもかゝるつとめを
中〳〵におもはぬものを〟
ひたすらに腹たゝしくや

織るが如く年の市にも
此ごろはあしあとさへも
時を得て主かほにも
見上れば一つのかむり
いかめしく槍のこじりを
二人有りひとりの衞士は
〝ものゝふと產れし者を
カイザルの冠をもりて
嗤れん賤の女ならば
ぬかづきて過ぎ行んかも
頂けるますらをの子の
なし得べき爾は徒づらに
行くまゝに任せておきね
心よりいさぎよしとは
いふをきゝて獨のえじは
思ひけん槍のこじりに

石をつくおとのたかくも　きこえけるかな
ヲルテルは父にひかれて　足はやみ御料の山を
指しつヲルテルに向いて　"わが父よ此山の上は
百くさの花の匂へど　一枝も森は茂れど
ひとうちの斧のおとをも　中々に國の律法の
ゆるさずて一枝折れは　忽ちに其手を切りて
すてらると羊をかへる　クヲニーの言ひにしとは
まことかも"父は答へて　"實に然なり彼方に高く
そびゆなる白き角にも　さも似たる氷の山の
いたゞきの見ゆる成らん"　鳴るかみの夜な／＼て
雪崩をば落とす氷の　峯ならん"父は答へて
"實にさなり麓の上に　森ありて雪崩を支ふる
なかりせば此アルトルフの　村里はとみにしかれん"
ヲルテルはしばしためらい　足曳の山あき國の
世中にありやなしや"と　と問へば父は答へて
"行く水の流れにそひて　我が里の高みを下り

進みなば森の流れの　おとしたえ水は湛えて
大空の色もうかみつ　とぶ鳥のかげもうつらふ
自然の鏡に似たる　いと廣き野原とならむ
見渡せば四方の限りは　あめとつち一となりて
麥粟も高く太けき　莖の上に實も重も／＼と
稔るなるひとつの庭と　見ゆるなり此地にながく
苦しみて居るやくすしと　おもよらめど彼の野は王の
ものにして森はあれども　獵りしえず流れはあれど
あみしえず鱸はあれども　燒きもえず是れ皆王の
ものにして民の者ならじ"　"人皆の恐るゝ王や
誰れならんきかまほしや　いかなれば獨りの王に
したがひて民は自ら　おのが身を守り得ざらん"
"志かはあれ彼處の民は　相共にむつみ得ずして
となりにも隔てのまがき　固くしてかたみにかよひ
もろ共にまかせ得ずとや"　"しかあれば廣しといふも
はが身には狹くそあれ　ともすれば峯のなだれの

落ち來んも此處の住居の　まさらずや"聞て首肯き
"實にさなり雪崩を肩に　受くるとも曲れる人と
もろともに軒をならぶに　くらぶればまさるなりけり"
父と子は打ちかたらひて　あゆみより梢の上の
冠りを唯流し目に　にらまへつ過ぎんとすれば
木かげより獨りのえじは　躍り出で眼いからし
槍をもてゆくてさえぎり　"仰せなりそこな動きぞ
いかなれば爾はカイザルを　敬まはですぎてゆくらん
いたづらに君を蔑みする　不忠不義不敬の罪の
重けきを知らずやはある"　あらぶれて虎の威をかる
野狐のかしましきかな　跖の狗堯に吠えにし
ためしあれば道なき時ぞ　憂かりけるかな
つはものは怒りに怒り　聲高みのゝしりければ
里人はあまた馳せ來て　赤心あかしのうらの
みをつくし心つくしも　中〳〵に拾ふかひなき
潮ざゐのおとのみ高み　つはものは國の律法を

楯として側邊に人の　なきが如く振舞ふからに
はやりをば今は堪えじと　のゝしりて拳を揮ひ
歯をかみて立にけるかな　折しもあれ遥にひゞく
獵り人の角笛強く　聞え來て下に〳〵と
よぶ聲に彼方をみれば　つかさびと（ヘルマン、ゲスレル）は
狩衣を身にまとひつゝ　猛々しく駒に打ちのり
手に鷹をもちつゝ來り　つはものもあまた後へに
從ひて手に〳〵槍を　もつみれば今日は如何なる
鳥やうつらむ
"底に事ぞえトなめせ"さの　み仰せに獨りの衞士は
腰を枉げおそる〳〵に　"やつがれは君に忠なる
衞士にして仰せかしこみ　カイザルの御冠こゝに
守るなり山鳩とても　空とぶを心のまゝに
許さぬを此しれものゝ　テルこそは上をなみせし
罪あればひかんとするを　村人は力のまゝに
爭ひて拒むなりけり　我が君"つかさはきゝて

〝やよテルよ是は民草の　大君の御稜威の風に
なびかんをためさんため。　しるしとてかけにしものを
いかなれば不敬の罪や　犯すらん爾が樣みれば
あきらかに不臣をわれに　反間るなりしばしたゆたひ
〝テルよ爾は射手の巧みと　きくからにいかなる的も
あやまたず〟ワルテル側より　〝實にさなり百の歩みを
へだてゝも父は林檎を　落すめり〟〝爾が子なるか〟
〝然なり君よ〟〝倚ほ子等を　〝唯たふたり〟〝孰かまさる
爾が愛の〟〝君よ一なり〟　〝さらはテル百の歩みを
隔てゝも林檎を射ると　いふからに今其業を
ためさまし〳〵弓とりね　とくとりね林檎をひとつ
なれが子の頭にをかん　一箭にて若し過ては
もろともに爾れか頭も　地にや落ちなん
ゆく前に千仭の谿あり　後へには獅子の吼ゆとも
中〳〵にますらたけをの　動かぬを親のなさけの
いかにして木の實一つと　唯だいへどわが兒の生命

弓はりてひかん力の　出で得べきつかさは國の
父にして父の心の　なかりせば民を子として
なづけつゝいかで國をや　しろすべき君君たらず
末遂に臣も臣なる　道をすて亂るなりけり
ゲスレルは鬼や魅入りし　うつせみの人の情けも
あらに田のかへす〳〵も　とく〳〵と梢の林檎を
手にとりて〝尊き的ぞ　よくも射ね八十の歩みや
與へまし眼になる射ぞ　手な射ぞいざとくたちね〟
伴人もテルが岳父の　ヒュルストも言葉つくして
右左り願ひ上くれど　中〳〵にきかぬものから
父の子のワルテル、テルは　勇ましく進み出でつゝ
〝いかでわれ曲れる人に　此の膝を折りやしくべき
我が父はみ空のとりの　翼をもあやまらぬ身の
いかにしてあやまるべしや　我が父よ彼は我等を
詛ふともわれはおそれじ　とく射ね〟と林檎を上に
いたゞきつ菩提樹の下に　立ちにけるかな

ゲスレルは蝮のごとき
目を張ていふをしきけば
"武器はかみのゆるしの
あらずして唯だ從らに
民の身に帶ふものならじ
帶ぶからに業のなくてや
とく射ねわれながめてん"
むらきもの心ふりおこし
ものゝふは弓づるしごきて
進み出で人をはらひて
手になれし箭を打ち番ひ
右手ひけば引かれて弓は
嵐吹く峯の林に
望月の傾きかゝり
ゆら〳〵とかげの亂るゝ
心ちして膝はふるひつ
手わなゝき張りし心も
ゆるびけん忽ち弓を
なげすてゝ胸押し開き
之を射よといへばゲスレル
あざわらひ"爾が業見ん
望みなる爾れが胸板を
何にせんとく〳〵起ちね
荒波も嵐も人を
すくはんとおもふ時には
やす〳〵と櫓を操る身の
いかにして價貴き
此のすくひ弓とりあげぬ
とやあるいざとくたちね
今はとてわなゝく其の手
めぐる目に忽ち空を
うち仰ぎ忽ち司さを

うち見やる心の中ぞ
大嵐吹きあるゝらん
親心いかにものうき
ものならんしかはあれども
ものゝふはおもひ定めて
手を早み矢箱より拔く
またの箭を袂にさしつ
一の箭を弦につがひて
また更に弓ひきしめて
たちければ從ふ人は
前後つかさにむかひ
是は王のおほせにあらじ
また君主の道にもあらじ
司さびと權威ありとも
我か王のみいづをけがす
其の業をもだし得べしや
ものゝふはものゝあはれを
知りてこそ眞の道に
かなふなれわがカイザルを
けがすなるわざを強ても
せんとなれば我等も共に
自由自主われは劒を
持なれ"と人民をさしつゝ
抗言へる折しもあれや
鯨波の聲木魂にひゞき
山嶋の二つ三つ四つ
驚きてたちにしあとに
ツルテルは落ちし箭つきの
實をひろひ此方にくれば
弓すてゝ兩手ひろげつ
はしりより父は抱きしめ
喜びて接吻すれば

人皆なは袖をしぼりて　ながむめり司さゲスレルは
伴人の捧ぐる林檎を　とり擧てよくも射たりと
ほめければさらばテルは　身を掃ひいなんとするを
司びと誓しとゞめ　問ひけらく袂にさしゝ
のちの箭は何となすらん　きかまほし眞かたりね
われもまた武士の言　守るらし“テルは心に
問へしおもひ定めて　”一の箭を若しあやまてば
のちの箭を君にまゐらす　外ぞなきと袂にさしゝ
箭をとりつ弦につがひて　ゲスレルをにらみ上ぐれは
”よしさなり我れ武士の　言を食ましかはあれども
直からぬ爾れが心を　さとりては月日もてらぬ
うば玉のやみに押し入れ　爾が弓の覘ひやさけん
やよ僕テルをいましめよ　彼を以てキユツスナハトに
舟路せん鷄の一聲　伴人の諫むる言も
白波のよする磯邊に　乗る駒のあがき早めて
ゆくあとを里人たちは　目送りて救ひの星は
落ちにきとかたみに嘆き　散ゆけばねぐらに還へる
夕がらすうら淋しくも　鳴きわたり入相の鐘は
久方の雲井遙かに　落ちにけるかな



# 女學雜誌社出版發賣書目錄

| 著者 | 書名 | 冊數 | 正價 | 郵税 |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 鈴木弘恭大人述 | 文法口授 | 全 | 金拾二錢 | 金二錢 |
| 松山高吉君著 | 邦文學 | 全 | 金二拾錢 | 無郵税 |
| 鈴木弘恭大人述 講述 | 雅俗諸體 作文口授 | 全 | 金二拾五錢 | 金四錢 |
| 同 標注 | 徒然草講義 | 一 | 金八錢 | 金二錢 |
| 同 著述 | 參考標注 徒然草拔萃 | 全 | 金貳十錢 | 金四錢 |
| 同 著述 | 參考標注 竹取物語讀本 | 全 | 金貳拾錢 | 金四錢 |
| 同 著 | 標注參考 土佐日記讀本 | 全 | 金二十錢 | 金四錢 |
| | 女學校用讀本 國文抄讀 | 五冊 | 一冊 金二拾二錢宛 | 一冊 郵税金四錢宛 |
| 池袋清風大人著 | 淺瀨の波 | 二冊 | 金三拾錢 | 金四錢 |
| 松田敏足君著述 | 明治女小學躾草 | 上下 | 金四拾錢 | 金六錢 |
| 香月恕經君著 | 記事記文 女子文例 | 全 | 金二拾二錢 | 金四錢 |
| 木村熊二君著 | 漢文抄讀 | 四冊 | 一冊 金二拾四錢宛 | 一冊 郵税金四錢 |
| 横山雅男君著 | 婚姻論 | 全 | 金十六錢 | 金四錢 |
| 船越鼎太郎君著 | 産婦小兒攝生法 | 全 | 金十錢 | 金二錢 |
| 三島通良君著 | 母のつとめ | 母の巻 子の巻 | 金七十錢 | 金六十錢 |
| 女學雜誌社編輯 | 兒育草 | 全 | 金二拾錢 | 無郵税 |
| 同編輯 | 女子生理 | 全 | 金二十五錢 | 無郵税 |
| 同編輯 | 子供のはなし | 全 | 金五錢 | 金二錢 |
| 村木經策君述 | 家政要旨 | 全 | 金五錢 | 金二錢 |
| 藤尾錄郎君著 | 家計簿記法 | 全 | 金二十錢 | 金四錢 |
| 透谷子著 | 蓬萊の曲 | 全 | 金八錢 | 金二錢 |
| 巖本善治君著 | 女學叢書 木村錄子傳 | 全 | 金八錢 | 金二錢 |
| 安東松治郎君著 | 貧兒の敎育 | 全 | 金六錢 | 金二錢 |
| 井上藤平君編 | 訓蒙繪双紙 猫と鼠 | 全 | 金五錢 | 金二錢 |
| 久野正香君著 | 看護婦美談 | 全 | 金貳拾五錢 | 金六錢 |
| 巖本善治君著 | 吾黨の女子敎育 | 全 | 金拾錢 | 無郵税 |
| 坪谷善四郎君著 | 日本女禮式 | 全 | 金五十錢 | 金十二錢 |
| 小野鐵之助君編 | かな習字帖 | 三冊 | 一冊 金拾錢宛 | 一冊 郵税金二錢宛 |
| 同編 | 文かきふり | 二冊 | 金三十六錢 | 金六錢 |

女學雜誌社出版書

# 子供のはなし　全

定價金五錢
郵稅金貳錢

目次

第壹回　田舍音樂師
第貳回　薑の君
第三回　熊と旅人
第四回　風と日の喧嘩
第五回　ハイ〳〵トダヾイマ
第六回　カンとクッドの話
第七回　王にも勝てる人々
第八回　母の愛
第九回　柔順なる娘
第十回　英雄の所業

東京下六番町
女學雜誌社

---

横山男君著

# 婚姻論

洋綴中本　二百三拾九頁
特別賣價　金拾六錢
郵便稅　金四錢

目次

(一)總論○(二)婚姻の定則○(三)婚姻は人類の天性○(四)婚姻の勢力○(五)婚姻數は社會の盛衰によりて增減す○(六)早婚上○(七)早婚中○(八)早婚下○(九)晩婚○(十)私婚上○(十一)私婚下○(十二)血族婚上○(十三)血族婚下○(十四)濫婚上○(十五)濫婚下○(十六)婚婚上○(十七)離婚中○(十八)離婚下○(十九)正婚○(二十)結婚年齡○(廿一)結婚年齡の差○(廿二)男女共諸法上○(廿三)男女共諸法中○(廿四)男女共諸法下○(廿五)男井互に擇ぶ事○(廿六)結婚の境界○(廿七)離婚○(廿八)結論○目次終

東京市麴町區下六番町六番地
女學雜誌社

---

明治二十五年自一月至十二月發兌書籍

◎詩篇註釋　アツキンソン氏著　村上俊吉氏　定價卅五錢●定價三十錢　使徒保羅の傳　松村介石氏著◎精神的講話　デボレスト氏著定價十五錢●ラーチッド氏著定價七十錢　羅馬書註釋◎眞理易知　古川道人著定價十五錢●井上氏著　活泉吟草　定價三錢◎約翰福音書批評　ラーチット氏著定價四錢●ラーチット氏著定價八十錢　馬可傳註釋◎信仰之事實　ローヅ氏編定價十二錢●松尾音次郎氏譯定價十錢　活る基督と四福音◎ラーチット氏著定價五十五錢　加拉太以弗所合註●四版　立志之礎　松村介石氏著定價二十五錢◎ムーデ氏說教　戸川安宅氏譯定價五錢　天路●家族主族　女子教育　望月與三郎氏著定價十五錢◎村田勤氏著定價三錢　救の門●青年共勵會とは何ぞや　定價三錢◎竹越竹代氏編　婦人立志編　定價二十錢●函嶺講話　夏期學校編定價二十五錢◎横井時雄氏譯定價八錢　天啓ト聖書●日本の道德と基督教　横井、原田、兩氏著定價八錢◎戸川安宅氏譯定價四錢　道の栞●宗教哲學　ラッド氏著定價十二錢◎松村介石氏著定價十五錢　デビニチー●インスピレーション詳論　深井氏譯定價二十錢◎吾家の歷史　天居主人編定價二十五錢●三並良氏譯　基督教約說　定價二十錢◎ひかり　石頼一氏著定價三錢●赤某先生口述定價十錢　基督教ト條改正◎大觀　平岡希久氏著定價八錢●内村鑑三氏著　未來觀念　定價二錢◎眞教要論　定價十錢　小谷部善之助氏著

右御注文願上候

發賣　東京新橋出雲町一　警醒社書店
仝　大阪西區土佐堀三丁目　福音社

一雜誌及び書籍代金二十錢未滿は郵券代用不苦候、郵券は五厘切手一割增の事

一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃とも濟にして御送付相成度候

## 女學雜誌代價

○白赤双方合せ購讀の分

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 十冊 | 前金 | 五十八錢 | 府外 | 六拾三錢 |
| 廿六冊(半年) | 同 | 一圓四十三錢 | 同 | 一圓五十六錢 |
| 五十二冊(一年) | 同 | 二圓六十錢 | 同 | 二圓八十六錢 |

○白赤の内一方購讀の分

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 六冊 | 前金 | 三十五錢 | 府外 | 三十八錢 |
| 十三冊(半年) | 同 | 七十三錢 | 同 | 七十八錢 |
| 廿六冊(一年) | 同 | 一圓三十錢 | 同 | 一圓四十三錢 |

一冊 金六錢　郵稅 金五厘

## 廣告料及無料廣告

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一行 | 一回 | (廿七字詰) | 前金 拾錢 |
| 同 | 三回以上 | | 一割引 |
| 同 | 六回以上 | | 二割引 |

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道德なる廣告は謝絕す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲くるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部 注文を要し以上半頁毎に十部増と定む。


發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三